

2008

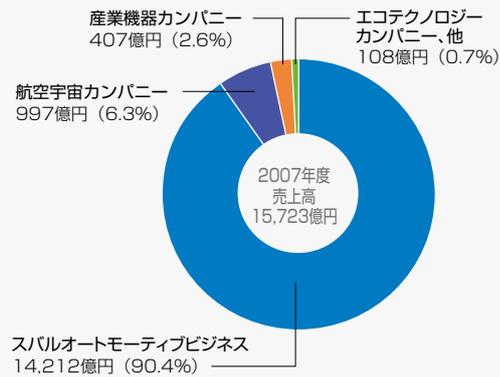


会社概要

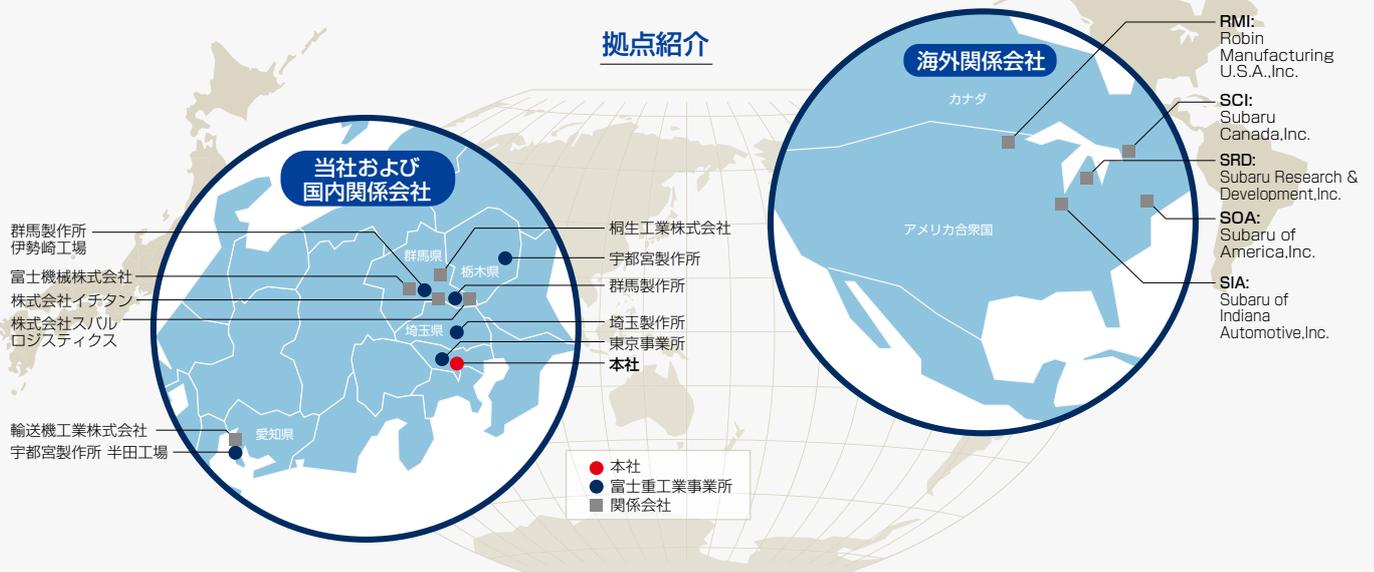
(2008年3月31日現在)

社名	富士重工業株式会社 (Fuji Heavy Industries Ltd.)
創立	1953年7月15日
資本金	1,537億円
従業員数	26,404名(連結) 12,801名(単独)
本社	〒160-8316 東京都新宿区西新宿一丁目7番2号 代表電話番号 03-3347-2111
売上高	15,723億円(連結) 10,188億円(単独)
営業利益	457億円(連結) 258億円(単独)
経常利益	454億円(連結) 248億円(単独)
連結子会社	国内44社、海外18社
持分法適用の子会社	国内16社、海外 5社

2007年度売上高部門別比率(連結)



拠点紹介



Social & Environmental Report

2008



表紙のデザインについて 「スバルと人と地球環境」

スバルの電気自動車と、さまざまなステークホルダーとの空間を演出し、スバルと人、地球環境のつながりをイメージしたデザインです。今後、お客さまに喜ばれる商品・サービスを提供するとともに、ステークホルダーの皆さまと地球環境との共生を目指していく姿を表現しています。



スバルも「チーム・マイナス6%」に参加しています。



みんなで止めよう温暖化

チーム・マイナス6%

編集方針

本報告書は、富士重工業株式会社・国内関係会社・海外関係会社の社会や環境への取り組み成果をご紹介します。お客さま・株主の皆さま、取引先・地域社会・従業員などのステークホルダーと、コミュニケーションを図り、取り組み内容のさらなる向上を目指すことを目的として発行しました。

本冊子では、できる限り重点を絞り、特徴的な取り組み成果については「特集記事」として取り上げ、読みやすい報告書を目指しています。そのため、環境会計集計結果や各種取り組みの詳細なデータにつきましては、当社のホームページで「2008社会・環境報告書webデータ編」としてご紹介しています。

[当社の環境への取り組みご紹介ページのアドレス]

<http://www.fhi.co.jp/about/envi/report/index.html>

また、本報告書の内容につきましては、2007年度版に引き続きCSRコンサルタントの海野氏(株式会社創コンサルティング代表)に第三者評価を依頼しました。これは当社が「社会的責任を全うする企業」を目指した取り組みを進めるうえで、役立つ意見、評価を継続的にいただきたいと考えたからです。この評価書は本冊子の巻末に記載しています。

2007社会・環境報告書 第三者評価への対応について

昨年度いただきました第三者評価に次のように取り組んでおります。

■CSR方針にコア・ビジネスの要素を盛り込み特色あるCSR活動を

CSR活動計画に商品の環境負荷・環境リスクの低減、交通安全活動などのコア・ビジネスにかかわる項目を織り込み取り組みを進めています。

■CSRの活動範囲をグループ全体、海外の生産、販売まで広げること

CSRと環境の活動組織をCSR・環境委員会に統合し、グループ全体でCSR活動を推進。海外主要企業でも活動体制を作り、動き出しています。

■基幹のKPI(キー・パフォーマンス・インジケータ)を検討、グローバルで収集しCSR活動に活用を

グループ全体のCSR共通活動項目から指標の検討を進めております。

■風力発電等エコテクノロジーへの取り組みの継続的報告を

巻頭特集で紹介。今後も継続して報告していきます。

[社会性報告]

■社内への意識浸透を継続して展開すること

全社方針のもと、各事業所で活動計画を策定・推進して意識浸透を図りましたが、社内アンケートではさらなる啓発が必要という結果に。引き続き意識浸透に努めていきます。

■お客さま第一に取組み重要性や従来の課題、今後の方向を示すこと

具体的事例として巻頭特集で社内・販売店でのCSへの取り組みを紹介しました。

■全体方針立案、活動重点評価、目標設定、成果評価という報告サイクルの検討を

CSR活動の主要項目について実績と次年度の計画を掲載しました。

[環境報告]

■マネジメントが国内に限られており、グローバルなチェック&レビューを

CSR・環境委員会にて海外主要企業の実績、計画を報告・審議。国内と同等の取り組みを進めています。

■燃費、排出ガス、クリーンエネルギー車という3つの重点要素がシンプルにわかるような工夫を
地球温暖化防止特集に取り上げるなどわかりやすい形で掲載しました。

対象範囲

対象企業

富士重工業株式会社(主要生産拠点の所在地)

- スバルオートモーティブビジネス
[群馬製作所(群馬県太田市他)、東京事業所(東京都三鷹市)]
- 産業機器カンパニー[埼玉製作所(埼玉県北本市)]
- 航空宇宙カンパニー[宇都宮製作所(栃木県宇都宮市、愛知県半田市)]
- エコテクノロジーカンパニー[宇都宮製作所(栃木県宇都宮市)]

国内関係会社(国内関連企業部会参画の5社)

- 輸送機工業株式会社(愛知県半田市)
- 富士機械株式会社(群馬県前橋市)
- 株式会社イチタン(群馬県太田市)
- 桐生工業株式会社(群馬県桐生市)
- 株式会社スバルロジスティクス(群馬県太田市)

注記:「2007社会・環境報告書」では国内関連企業部会参画は6社でしたが、富士ロビン(株)につきましては、(株)マキタに当社が保有する富士ロビン(株)の全株を売却したため、2007年度実績から除外となりました。

海外関係会社(北米環境委員会参画の5社)

- S I A : Subaru of Indiana Automotive, Inc. (インディアナ州ラファイエット)
- SOA : Subaru of America, Inc. (ニュージャージー州チェリーヒル)
- SC I : Subaru Canada, Inc. (オンタリオ州ミシサーガ)
- SRD : Subaru Research & Development, Inc. (ミシガン州アンナーバー)
- RM I : Robin Manufacturing U.S.A., Inc. (ウィスコンシン州バドノン)

上記以外の関係会社につきましては一部活動状況を紹介しています。

対象期間

2007年度(2007年4月~2008年3月)の実績と一部それ以前の取り組みや本報告書発行直前までのものを含みます。

※海外関係会社については2007年1月~12月の実績となります。

◇参考としたガイドライン

環境省「環境報告ガイドライン(2007年度版)」

◇本報告書に関するお問い合わせ先

富士重工業株式会社 総務部 CSR・環境推進室
〒160-8316 東京都新宿区西新宿一丁目7番2号
TEL.03-3347-2036 FAX.03-3347-2381

03	トップメッセージ
05	事業紹介 Introduction of SUBARU
	【2008特集】
07	—購買環境委員会の活動 CSR調達への取り組み
09	—お客さま満足度向上へ向けて お客様第一推進部の視点
11	—特約店での取り組み CS最前線へ進化し続ける東京スバル中野店
13	—地球にやさしいクルマづくり 新型フォレスターの環境性能
15	—SUBARUの“地球温暖化防止への取り組み” 商品開発での取り組み スバルグループにおけるさまざまな取り組み
	【社会性報告】
19	CSR・環境委員長メッセージ、企業理念
20	CSR取り組み概要
22	コーポレート・ガバナンス
23	コンプライアンス
25	すべてはお客さまのために
28	株主の皆さまとともに
29	社会とのかかわり
32	従業員とともに
	【環境報告】
35	環境マネジメント
39	第4次環境ボランティアプラン
40	クリーンな商品
43	クリーンな工場
46	クリーンな物流
47	自動車リサイクル
49	クリーンな販売・サービス
50	第三者評価



2008社会・環境報告書webデータ編内容

当社ホームページから簡単にダウンロードできます。

[当社環境取り組みご紹介ページのアドレス]

<http://www.fhi.co.jp/about/envi/report/index.html>

- 社会・環境への取り組みの歴史
- 会社概要
- 環境マネジメントデータ
- 社会・環境への地域での取り組み

Top Message

「存在感と魅力ある企業」、
「社会的責任を全うする企業」の実現を
図ってまいります



[Photo:エクシーガ2.0GT]

本書に関心をお持ちいただきました皆さまに感謝を申し上げます。

さて、今年は京都議定書の約束期間初年度であり、また地球温暖化問題が主たるテーマとなったG8サミットが北海道洞爺湖において開催されました。このように地球規模で持続可能な社会の実現に向けた取り組みが本格化するなか、スバルグループにおきましても、ますます重要性の高まる地球温暖化防止をはじめとする、あらゆる環境問題に対する取り組みを強化、推進しております。

当社では、環境活動をCSR活動の最重要項目として認識するとともに、これらの社会問題に対処することが「企業市民」として当社が果たすべき使命と考え、スバルグループ全体での取り組みを進めております。

具体的には、2007年度から新たにスタートした「第4次環境保全自主取り組み計画」のもとに、地球温暖化防止・省エネルギー、廃棄物や環境負荷物質の削減などにグループをあげて取り組み、また環境対応商品として燃費、排出ガス性能を大幅に改善した新型インプレッサ、新型フォレスターを発売、また乗用車用として世界初となる水平対向ディーゼルエンジンを搭載したレガシイを欧州市場に投入しました。

今後もクルマを中心とした総合輸送機器メーカーとして、地球温暖化防止やそのための低炭素社会実現等さまざまな社会問題に対して商品開発から生産、物流、販売、自動車リサイクルに至る事業活動のあらゆる段階を通じてこれまで以上の積極的な取り組みにより貢献してまいります。

また、このようなさまざまな取り組みを推進するために企業基盤をさらに強固なものとするべく、新中期経営計画を推進しているところですが、その達成をより確かなものとするための施策として、トヨタグループとの新たな協業とこれを活用した

国内での完成車組立工場の新設、国内スバル販売網の再編などの事業構造の改革を公表いたしました。

この事業構造改革により、開発工数、生産能力などの経営資源を効率的に収益性の高いコア分野や将来の環境技術開発に傾斜配分するとともに、お客さま満足度の向上を図ることによりスバルブランドを強化し、「存在感と魅力ある企業」、「社会的責任を全うする企業」の実現を図ってまいります。

これらの事業構造改革におきましても、「第4次環境保全自主取り組み計画」の目標達成を目指し、これまで以上に取り組んでまいり所存です。

2008社会・環境報告書を通じて、スバルグループの社会や環境に対する取り組みをご理解いただくとともに、忌憚のないご意見をちょうだいできれば幸甚でございます。

代表取締役社長

森 郁夫



Introduction of SUBARU

独創的な先進技術で、時代ニーズに対応した 商品を開発・製造

富士重工業株式会社は、スバル[SUBARU]ブランドのもと、総合輸送機器メーカーとして4つの事業部門を展開しています。「スバルオートモーティブビジネス」「航空宇宙カンパニー」「産業機器カンパニー」「エコテクノロジーカンパニー」。その独創的な先進技術と個性により、快適で楽しい未来の創造に貢献します。

■「すべてはお客さまのために」という姿勢で商品を提供

スバルオートモーティブビジネス



所在地	群馬製作所(群馬県太田市) 東京事業所(東京都三鷹市)
-----	--------------------------------

スバルは1958年に「スバル360」の発売で自動車メーカーとしてスタートを切って以来、日本の自動車産業の発展に寄与する個性的なクルマを送り出してきました。たとえば、「スバル360」は、航空機づくりのアイデアをふんだんに採り入れた精緻なパッケージング、徹底した軽量化に斬新な技術的特長がありました。1966年に発売した「スバル1000」は、スバルの個性ともいえる水平対向エンジンを搭載。量産車として先駆けとなる前輪駆動（FF）レイアウトを採用しました。

1972年、世界初の乗用四輪駆動車を発売。以後スバルは、このレイアウトを「シムメトリカルAWD*1システム」として確立してきました。1990年代以降、日本ではハイパワーターボエンジンと四輪駆動を組み合わせた高性能ステーションワゴン、米国では乗用車の快適性とSUVの機能性を融合させた「クロスオーバー」*2という分野を切り開いてきました。

スバルは、「ドライバーズカー」として快適で楽しい走りを約束するクルマの開発を続けてきたのです。

エクシーガは、「7シーター パノラマ ツーリング」がコンセプト。乗る人すべてが、会話や景色、ツーリングすることの楽しさを共有でき、安心してつづる快適な移動空間を持つ多人数乗り車です。スバルがこれまで培ってきたワゴンづくりのノウハウを活かし、7人までしっかり乗れる高い居住性と開放感あふれる室内空間を実現。スバル独自の水平対向エンジンレイアウトや、SI-シャーシ（SUBARU Intelligent-Chassis）コンセプトによる高い操縦安定性、優れた静粛性、しなやかで上質な乗り心地などあわせ、環境性能や経済性にも配慮し、多人数乗り車の新しい価値を提案しています。

[Photo:エクシーガ2.0i-L]

Automotive
Business



国内関係会社

富士機械株式会社(群馬県前橋市)
事業内容:自動車部品・産業機械・農業用トランスミッションの製造、販売

株式会社イチタン(群馬県太田市)
事業内容:自動車・産業機械用鍛造品の製造、販売

桐生工業株式会社(群馬県桐生市)
事業内容:スバル特装車の製造・スバル用部品の物流管理・スバルエンジン、トランスミッション等の再生

株式会社スバルロジスティクス(群馬県太田市)
事業内容:自動車およびその部品の梱包、出荷、陸送業、倉庫業、整備業、保険代理店業

海外関係会社

SIA: Subaru of Indiana Automotive, Inc.
スバル オブ インディアナ オートモーティブ インク
(インディアナ州ラファイエット)
事業内容:米国におけるスバル車の製造、トヨタ車の受託生産

SOA: Subaru of America, Inc.
スバル アメリカ インク
(ニュージャージー州チェリーヒル)
事業内容:米国におけるスバル車および部品の販売、整備

SCI: Subaru Canada, Inc.
スバル カナダ インク
(オンタリオ州ミシサーガ)
事業内容:カナダにおけるスバル車および部品の販売、整備

SRD: Subaru Research & Development, Inc.
スバル リサーチ アンド デベロップメント
(ミシガン州アンナーバー)
事業内容:北米市場におけるスバル車の研究開発

1917年に創設された航空機メーカー「中島飛行機」。航空宇宙カンパニーはその航空機づくりの技術とスピリットを受け継ぎ、主翼などの複合材を含む航空機構造体の開発技術や、無人機分野でのIT技術、飛行制御技術を融合した高度システムインテグレーション技術など、さまざまなカテゴリーでナンバーワン技術を確立しています。その技術を応用し、ヘリコプター、固定翼機、無人機の開発・生産を行っています。

さらに、大型旅客機や小型ジェット機の開発・生産にも参画。世界レベルでの発展を目指して、新たな分野に積極的に挑戦しています。

■航空機づくりの技術とスピリットを今に活かす 航空宇宙カンパニー

所在地 宇都宮製作所(栃木県宇都宮市)
半田工場(愛知県半田市)

Aerospace
Company



「エア・タクシー」と呼ばれる新しい輸送需要を担う低価格の小型ビジネスジェット機として注目される「エクリプス500」。当社は最新の製造技術を活かしてその主翼の組み立て等を担当、航空機の大量・低コスト生産技術の確立を目指しています。

[Photo:エクリプス500]

国内関係会社

輸送機工業株式会社(愛知県半田市)
事業内容:航空機部品の製造、販売

■地球のあらゆる場所で使われる 汎用エンジンを量産

産業機器カンパニー

所在地 埼玉製作所(埼玉県北本市)

産業機器カンパニーでは、「ロビン」ブランドの汎用エンジンとロビンエンジンを搭載した商品を開発・生産・販売しています。ロビンエンジンは2,000種類以上の豊富なラインアップでお客さまのニーズに応え、社会の基盤をつくる建設機械や農業機械をはじめ、豊かな生活を彩るレジャー機器、発電機など、世界中で愛用されています。酷暑、極寒、砂漠、水上など地球上のあらゆる場所、使用条件で安定的に働き続けるため、性能向上に努めています。



EX35-40エンジンはチェーン駆動のOHC動弁機構の採用により、優れた環境性能と高性能を高次元でバランスした汎用エンジンです。OHCならではの高出力燃焼室設計により、環境にやさしい低排出ガス性能、低燃費、低騒音や優れた始動性と、クラス最高レベルの出力性能を実現する次世代エンジンとして販売を開始しました。

[Photo:EX40エンジン]

海外関係会社

RMI : Robin Manufacturing U.S.A., Inc.

ロビン マニュファクチャリングUSA インク
(ウィスコンシン州ハドソン)

事業内容:米国における汎用・四輪バギー・ゴルフカート用のエンジンの製造、販売

Eco
Technologies
Company

■住みよい環境と資源循環型社会に貢献する

エコテクノロジーカンパニー、他

所在地 宇都宮製作所(栃木県宇都宮市)

エコテクノロジーカンパニーは、廃棄物の収集運搬やリサイクル処理のための各種車両・装置など、住みよい環境と資源循環型社会に貢献する多様な製品を手がけています。またクリーンなエネルギーを生み出す風力発電システムを開発し、製品を通じて地球環境保全に取り組んでいます。

〈クリーンロボット部門〉

世界で初めて実用化した高層ビル無人清掃ロボットの技術は、屋外型清掃ロボットやごみ搬送ロボットの実証実験に応用されています。



塵芥車のグローバルスタンダードを目指して、当社と新明和工業が共同で次世代型新型回転板式塵芥車「G-RX」を開発しました。無駄な余肉をそぎ落とし軽量化させるとともに、油圧配管の圧損低減、低騒音化、環境負荷物質削減等を図り、従来の塵芥車に比べ環境性能を大幅に向上させています。

[Photo:フジマイティ G-RXシリーズ]

※1 AWD : All Wheel Drive 4輪駆動

※2 クロスオーバー:1995年8月ステーションワゴンにSUVの機能性を融合させたスバルアウトバックを発売。



特集1 | 購買環境委員会の活動

CSR調達への取り組み

グローバルな事業展開において重視されつつあるCSR調達ですが、2011年までにCSR調達ガイドラインの策定を目指すスバルも、その取り組みをスタートさせました。CSR調達への取り組みに対する活動の一端を紹介します。

2011年のガイドライン策定を目指して 購買環境委員会が活動しています

スバルでは、自動車、産業機器、エコテクノロジー、航空宇宙という各事業部門の購買部マネージャーからなる購買環境委員会が、年2回開催されています。これは各事業部門における環境面での取り組みの連携を図るべく発足したものです。主にお取引先さまの「環境マネジメントシステム(EMS)」と「環境負荷低減」を推進するための情報交換を行っていますが、CSR調達の取り組みについて今年度より活動を開始いたしました。

4月下旬に開いたミーティングには(株)創コンサルティング代表取締役の海野氏を招き、CSR調達の目的や必要性等の基本的な考えや他社事例などのレクチャーを受けたあと、各カンパニーの状況報告が以下の通り行われました。

グローバルな調達環境下で活動を展開中

■自動車部門

①環境について

- 最新法規やCSR活動に対応してグリーン調達ガイドラインを見直し、環境活動エリアを拡大します。
- レガシィなどを生産している米国の製造会社SIAにおいて新たにグリーン調達ガイドラインおよびお取引先さまとのIMDS*1データ管理を展開していきます。
- 環境負荷物質についてはEU指令に基づく削減やANNEXII*2の改訂への対応を行っています。今年はさらにREACH規則*3への対応を行っています。
- お取引先さまのEMS構築について、ISO14001またはそれに代わるエコアクション21の認証取得を推奨しています。

②コンプライアンスについて

- 自動車産業適正取引ガイドラインの策定へ参画し、スバルとしてお取引先さまへ展開しています。

③リスクマネジメントについて

- CSRの活動では、地震をはじめいざというときのリスクマネジメントについて、地域にお住まいの方や行政との協力関係などを含めて検討しています。
- 労働安全衛生マネジメントシステムをもとに、危機管理や安全衛生にかかわる取り組みを行っています。

*1 IMDS(International Material Data System)：自動車を構成する約3万点の部品の材料および含有物質情報を収集するためのシステム。新型車の環境負荷物質、使用済み自動車やリサイクル率に関する規制などを含んだEU指令に対応するために開発された。全世界の自動車業界における標準システムとして稼働しており、IMDSは日本自動車工業会(JAMA)に認定された物質情報収集システムのひとつとして業界スタンダードとなっている。

*2 ANNEXII(付属書)：科学的に実行不可能などの理由により、RoHS指令の適用除外となる製品や部品が記載されており、原則2年に1回、内容が見直される。



CSR調達への取り組みについて意見交換が行われた

石原購買本部長(左) 中村購買企画部長(右)

アジアにおける部品調達先の体制整備が課題

■産業機器カンパニー

- EMS構築の対象お取引先さまの100%で構築を継続中です。対象102社の内訳はISO14001の認証取得が80社、エコアクション21他簡易版EMS取得が3社、自主診断報告が19社です。
- 環境負荷物質の低減については六価クロム、鉛の全廃に向け活動を継続中であり、さらに今年はREACH規則への対応を急いでいます。
- アジアの直接お取引先さまが増えており、グリーン調達やEMSの構築が課題となっています。

エコアクション21認証取得の支援活動を継続

■エコテクノロジーカンパニー

- お取引先さまの多くが小規模であるため、EMS管理部隊が環境パトロールに出向き、生産現場の状況確認などを行っています。
- エコアクション21の認証取得の準備を支援するための講習会を開いています。今後、対象40社すべての認証取得を目指します。
- 風力発電の事業化に伴う新たな欧州やアジアのお取引先さまでは、ISO14001の認証取得計画を進めていますが、まだ1年目であり体制を整える準備段階です。

EMS構築の対象お取引先さまの拡大を目指す

■航空宇宙カンパニー

- EMS構築の対象お取引先さま61社のうち、47社が完了しました。その内訳はISO14001の認証取得が40社、エコアクション21の認証取得が3社、自主診断報告が4社です。
- 同じ製作所にあるエコテクノロジーカンパニーとともにお取引先さまの環境パトロールを実施しています。
- 環境負荷物質の低減については独自のグリーン調達ガイドラインに則って有害物質の含有チェックを行っており、2007年度は対象物質はありませんでした。

事業部門ごとにベストを尽くす取り組みを

これらの報告に対し、海野氏から「お取引先さまのEMS構築についてISO14001認証取得に限定することなく、エコアクション21など幅を持たせてお願いしている点は評価できます。ただ、安全衛生、環境対応、企業倫理等の項目は、通常のマネジメントシステムの中で対応できていますが、労働者管理の項目が課題です。CSR調達ではそうした労働環境・人権の対応にも配慮してください」と

の指摘がありました。

また、カンパニー制を敷いているために事業部門によって各種の取り組みが異なり、統一性がないという課題があります。例えば、EMS構築は、自動車部門はISO14001の認証取得が基本であるのに対して、他カンパニーではエコアクション21の認証取得や自主診断が主になっているところもあります。このような課題について、海野氏は「事業部門によって取り組みが違うのは当然です。無理に1つにまとめるのではなく、事業部門別に運用し、柔

軟にしておいてよいと思います。アジアの企業と取引先が増えている産業機器カンパニーは労務管理、安全衛生に重点的に取り組まなければならないように、各事業部門の現状の中で、それぞれがベストを尽くすべきでしょう」とアドバイスをいただきました。

簡単に答えは出ませんが、各カンパニーからの現状報告や意見交換によって、取り組むべき課題の明確化と共有化が今回図れたことは確かであり、一歩ずつCSR調達に向けた活動を進めていきます。

※3 REACH規則：数多くの化学物質による健康・環境へのリスクを体系的に評価し、これを適切に管理することに向けたEUの地域レベルの取り組みのひとつ。



お客様第一推進部
部長
手塚 淳一

ディーラーサポートのスタッフが 課題発見から解決まで継続的に支援

2007年5月に、特約店と一緒に
お客さま対応の改善を行うディーラーサ
ポートグループを結成しました。現在、9名の
メンバーがそれぞれ担当する特約店に入
り、新車の営業、サービス、おもてなし、ショ
ールームなどにおけるお客さま対応上での
問題点を抽出し、具体的な改善策を提案
して改善活動を進めています。

社長、幹部、店長から話を聞き、業務標
準であるスバル・スタンダードに基づいた
業務がなされているかをチェックシートによ
って確認します。こうして、まず課題の見
え易さを図ります。

課題が見えてきたら改善策を確定し、
仕事の組み換えなど具体的な流れをつ

り、改善を進めています。特約店のスタッ
フは、先輩から後輩へと伝承するかたちで一
生懸命仕事をしているので、その思いを理
解し、じっくりと話し合いながら活動を進
めています。

2つのテーマを軸に 顧客対応力の取り組みを強化

一方、2004年の第三者調査機関
(株)J.D.パワー アジア・パシフィック社に
よる日本自動車セールス満足度 (SSI) 調
査で、業界最下位となってしまったことを
踏まえ、業界中位を目指して2つのテーマ
を掲げ、特約店全体で取り組んでいます。

1つは、スタッフ全員によるお客さまのお
出迎えを100%実施することです。簡単な

特集2 | お客様満足度向上へ向けて

お客様第一推進部の視点

グローバルな視点でスバルチーム全体のお客さま満足度の向上を図るため、
2007年4月に設置されたお客様第一推進部では、
「国内外の特約店のお客さま対応力強化」を主題として活動を展開しています。
その結果、お客さまの満足度が向上し、特約店から取り組みへの期待が高まっています。



特約店のお客さま対応力強化へ 専任チームがサポート活動を展開しています



このようですが、実際には完璧に行動するのは簡単ではありません。しかし、最初に良い印象を持っていただくことで、次の話がスムーズに進むと考え、各特約店が継続して実施しています。

2つ目は、営業拠点で週1回の勉強会を継続実施です。

知識が豊富なお客様のご質問に答えるのは容易ではない場合がしばしばあります。しかし、セールスマンが高い商品知識と傾聴スキルを持ってお客様と接することで、ニーズを知



お客様第一推進部
グローバルCS推進課 主査
一柳 典利

ることができ、ご要望にお応えできると考え、CS向上につなげる知識とスキルの強化を行いました。商品の機能、他メーカーとの違い、その機能がお客さまにとってどのような利益があるか、というところまでをお客さまに説明し、満足していただくためにはセールスマンが機能をよく理解していることが重要だからです。

このように、各特約店ではお客さまを全員でお出迎えし、高いスキルのもとでのコミュニケーションを心がけています。

この取り組みを続けた結果、多くの特約店で改善が進みました(東京スバルで

の取り組み詳細は11ページをご参照ください)。また、当社は2007年の(株)J.D. パワー アジア・パシフィック社の日本自動車セールス満足度 (SSI) 調査^{※1}で5位、日本自動車サービス満足度 (CSI) 調査^{※2}で7位となり、取り組みの正しさを再確認しているところです。



お客様第一推進部
グローバルCS推進課 課長
木村 真

[お客様第一推進部目標]

グローバルな視点でスバルチーム全体のお客さま対応力・お客さま満足度の向上を図る。

19年度 重点課題

- ①CS維新重点活動の推進・定着化
(接客対応力の向上を更に進め、(株)J.D.パワー アジア・パシフィック社のSSI・CSI調査で業界中位を狙う。)
- ②拠点長のリーダーシップによる拠点全員での問題解決
(阻害要因の撲滅について支援し、拠点活性化を図る。)
- ③成功ノウハウの蓄積と共有
(スバルチーム内で成功ノウハウを共有することにより、改善の効率化、チーム全体のお客さま対応力の底上げを図る。)

海外8カ国の主要特約店の「G8会議」で海外への取り組みを発表

2007年10月、世界8カ国のスバルグループ主要特約店が集結した会議、通称「G8会議」において、CS向上のプレゼンテーションを行いました。お客さま満足に対する考え方は世界共通ととらえ、国内で実施している取り組みについて各国での実施を呼びかけました。

また、新規に参入して需要が拡大している中国やロシアなどに対して、お客さま対応力の領域では十分に支援ができていないため、国内のツールを翻訳して提供することを考えています。

17年の歴史がある国内のCS改善活動をベースに、分かりやすいかたちで海外への展開を計画しています。



個人情報保護や店内環境など細かな部分までチェック

環境への配慮も忘れていません。ディーラーサポートグループが5S活動を基本に、拠点の点検をするときにはサービス工場を使うエンジンオイルなどを排水から分離する油水分離装置が設置されているか、それがきちんと機能しているか、また、油を保管する油脂庫が整理整頓されているか、ということもチェックしています。これは美観の問題以上にそれぞれ地方自治体のコンプライアンス上の必須項目であり、お客様第一推進部の活動のひとつです。

一方、偽装問題やデータ改ざんなどコンプライアンス違反が頻発する現代社会において、適正な企業経営をすることが求められている中で、お客さまのプライバシーが守られているか、個人情報がきちんと管理されているか、ということも改善活動の領域となっています。

CSエリアナンバーワンへ向けさらなるステップアップを目指す

特約店の地域にはそれぞれの特徴があります。自店のテリトリーの中でCSのナンバーワンを目指そうとする新たな考えのもと、4月から「CSエリアナンバーワン戦略」をスタートさせました。

従来は、特約店での接遇にCS向上の力点が置かれていましたが、新中期経営計画が策定され、「お客さま第一」を基軸とした取り組みの中で、元気の良い挨拶やマナーを守ることもCSの一部ですが、実際の業務の部分でどれだけお客さまの期待を上回る仕事を提供し、感動を与えていくかが、これからは重要になります。それを実現させるのが、お客様第一推進部の役割です。

「お客さま第一」を実践するためには何をしたらいいのかと、社員一人ひとりが常に考えるという体制を構築し、時間をかけて全社員の意識改革に取り組んでいきます。

※1 出典：(株)J.D. パワー アジア・パシフィック 2007年日本自動車セールス満足度 (SSI) 調査SM。
2007年調査は新車購入時の販売店対応に関して乗用車(除軽自動車)新車で購入したユーザー5,444人から回答を得た結果。
※2 出典：(株)J.D. パワー アジア・パシフィック 2007年日本自動車サービス満足度 (CSI) 調査SM。2007年調査は販売店のアフターサービス(整備・修理など)に対する乗用車(除軽自動車)保有ユーザー5,359人から回答を得た結果。



特集3 | 特約店での取り組み

CS最前線~進化し続ける東京スバル中野店

富士重工業では「お客さま第一」のポリシーを、徹底して実践に変えていくため、全国の特約店にお客様第一推進部からスタッフを派遣し、特約店とともに推進しています。一方、各拠点においても話し合いのなかから、「自分たちは何をすればよいのか」という独自の課題を発見し、取り組みを続けています。



CS推進活動にゴールはない —— 高まるお客さまの期待に対応も進化しています

お客さまに何度も来ていただき 長くいていただける店づくりとは

東京スバル中野店は目白通りに面し、中野区全域を担当エリアとしてお客さまをお迎えしてきました。

「共働きや余暇で外出する方が増え、お客さまを訪ねても会えないことが多くなった今、自動車販売は訪問から来店対応ヘシフトをしています。ところが、赴任した時の中野店は、店内の雰囲気にも明るさがなかった。そのせいか点検に来られても、『後から引き取りに来るから』と帰られてしまうお客さまが多かったのです。お客さまを気持ちよくお迎えし、少しでも長く在店していただき、さらには何度も足を運んでいただくために、どのようなお店づくりをすれば良いのが課題でありました」

昨年10月、新店長として赴任してきた山下修さんは、当時を振り返ってこのようにお話されます。

山下店長は改善のポイントが2つあると指摘しました。

1つはハードである店舗。ショールームリ

ニューアルの必要性を強く感じました。

ショールームは、富士重工業「スバル50周年記念モデル店舗」の指定を受けることができ、現在の明るくてきれいなショールームが完成しました。お客さまに修理の様子を見ていただけるよう、工場をガラス張りにしたり、キッズコーナーの横にお母さんが座れるソファを置いたり、店内は細かな配慮が散りばめられたおもてなしの空間に生まれ変わりました。

もう1つはソフトであるスタッフの意識。すでに1年半ほど前から月に1回、社員自らが課題を発見し、取り組みまで検討するCSスクラム会議が開かれていたものの、改善に結びつく成果はなかなか現れていませんでした。同店CS委員・西村亮子さんは当時の状況をこう話します。

「お客さまと向き合ったときの1対1の対

応はそれなりにできていたのですが、お店全体でお客さまをお迎えするという雰囲気はなかったです。例えば駐車場までスタッフの目が届かず、お客さまがどこに車を停めればいいのかと、きよろきよられていることもよく…。

CSスクラム会議で、お客さま対応について何度も話し合いましたが、スタッフ同士、なかなか活発な意見交換ができず、また決まったことが実行できずにいました。

よく言われますが、会議は参加者が当事者意識をもつことが肝心です。そのためには、決まったことに全員の意見が反映される必要があります。しかし、人前で話すことが苦手な人、最初から参加意識の希薄な人からは、なかなか声が上がらない。そこに店長とCS委員のジレンマがありました」



迷わず駐車できるように
駐車場に彩色



店内のお客さまから様子が見えるように
工場をガラス張りに



親子でくつろげるキッズコーナー

そんな時西村さんは、東京スバルCS推進課主催のCS委員(スクラム会議の司会者)に対するファシリテーション*1研修に参加したところ、「会議は進行役次第で意見が出やすく楽しいものになるのだ」ということを学び、実際のスクラム会議で実行。「いい意味で皆もリラックスし、活発な意見が交わされるようになりました」また、「自分たちが決めたことを自分たちで実践していこうという意識が日々の行動に繋がっていく、と一人ひとりが思い始めています。中野店の活性化はある意味これからがスタートですね」と、西村さんは笑顔を見せます。



マインドのレベルアップが成果に しかしまだまだ進化は続く

「いらっしゃいませ!」

扉が開くと、いつもの明るい声がお客さまに飛んでいきます。東京スバルがCS取り組みの一つに掲げるウエルカムビーム。もちろんお客さまが帰られるときには、「ありがとうございました!」のサンキュービームが“発射”されます。

一方駐車場に目をやると、いくつかのエリアが彩色され、車で来られたお客さまが迷わず駐車できる工夫が。さらに、何かあればすぐに飛び出せるよう、いつも営業マンの誰かが目を向けています。

「スタッフたちも最初のうちは戸惑っていたようです。挨拶ひとつにしても声が出なかったり、仕事の手を休めなかったり。しばらくは、そういう人に対して色々な機会を“なぜ全員で実践しなければならないか”を理解してもらおうことが私の役割でした」

山下店長は振り返ります。

セールスに欠かせない商品知識の習得については、東京スバルの全店が取り

組む、週1回のセールス勉強会へ積極的な参加を促すとともに、新商品などが出たときには、全員を集めて臨時勉強会を開くなど、高水準の維持が図られてきました。

「ハードもソフトも格段によくなりましたね」と、新生・中野店を評価するのは、東京スバルCS推進課の菅原陽子さん。「もともと中野店のスタッフは感じがよく、仲もよいので全体的に雰囲気は悪くない印象でしたが、スタッフ一人ひとりが、自分のやるべきことに自信と責任を持てるようになったのでしょう。ハード面の充実と、何よりそのマインドが、お客さまをお迎えする自信にもなり、CS効果として現れてきているのだと思います。これからの中野店はますます期待できます」

「まだまだ、しなければならぬことはいっぱいあります」と、山下店長。「CSレベルがワンステップ上がれば、お客さまの期待もワンステップ高くなります。CS推進活動は進化し続けなければ。スタッフにはこれから実力を発揮してもらいたいものですね」

大きく様変わりしたお客さまのニーズに どれだけ対応しきれるかがCSの鍵

ニーズの多様化と言われて久しくなりますが、自動車はその波を最も大きくかぶった業界かもしれません。かつての若者は、車に乗ることに大きなステータスを感じていましたが、今は携帯電話やパソコンなど、自動車のライバルは同業者だけではなくなりました。

そんな状況で、新しくスバルに乗ってくださるお客さまはもちろん、これまでご愛顧いただいているお客さまに、なおいっそうスバルを好きになり、買い換える際も選んでいただくために、CSは欠かせないコンセプトです。その実践のために、東京スバルでは3つのCS目標と7つの取り組みを順次策定。また、各拠点から2名のCS委員を選出し、店長とともに本社営業支援部CS推進課と協力して取り組む体制をつくりました。

しかし、最も重要なのはマインドです。メーカーメーカーである商品力や企業イメージに魅力を感じたお客さまとの、最初の接点となるのが私たち販売店。お迎えするスタッフも店舗も、決してその期待の足を引っ張るものであってはならない。それだけに各拠点のスタッフには、自分がやるべきことをしっかりと認識し、お客さまの視点に立って行動することが求められるのです。

富士重工業からのディーラーサポートグループの指導や、自らの課題を話し合うCSスクラム会議、最新の商品知識を学ぶセールス勉強会などを通じて、彼女らは多くのことを吸収し、モチベーションを高めています。

お客さまにご満足いただくための道のりにゴールはありません。私たちもスバルグループはもとより、自動車業界トップクラスのCSを目指してさらに努力を続けていきます。

【 CSの目標 】

- まずは全国のスバルで総合満足度ポイントベスト10上位入りを目指す
- 数値にプラスして、心をこめた親切かつ丁寧なお客さまへの対応の徹底
- 東京マーケットにおけるCSナンバー1ディーラーへのチャレンジ

【 CSの取り組み 】

- 1 まずは「挨拶」
- 2 ウエルカムビーム&サンキュービームを全員で発信
- 3 CSスクラム会議の定期的な開催
- 4 実践に活かすセールス勉強会の実施
- 5 拠点美化と快適ショールームづくり
- 6 東京スバルスタンダードの徹底推進
- 7 ご来店されていないお客さまへの働きかけ



東京スバル株式会社
代表取締役社長
塚原 穰

*1 ファシリテーション：会議などで参加者の相互理解と合意形成を導き集団・組織を活性化させる手法。



安心・安全のための機能も向上

スバルではこれまで「アクティブセーフティ(予防安全)」の考え方を重視し、その具現化に努めてきました。新型フォレスターにおいてはVDC*1を全車に標準装備。これはクルマの挙動がドライバーのコントロールの限界付近になると、エンジン出力やブレーキを制御して横滑りなどを防止する機能が働くもの。またABS*2やブレーキアシスト、ヒルスタートアシスト*3も備えています。従来モデルの見晴らしのよさを受け継ぎ、ボディ形状を工夫して、ドライバーから車体の4隅やすぐ後方が見えるようにしていることも、安全性向上に貢献しています。

もし万が一、衝突してしまった場合の安全性、いわゆる「パッシブセーフティ」に関しては、スバルの伝統技術と言える新環状力骨構造をさらに進化させ、これまで以上に衝撃吸収の性能を高めています。歩行者保護の機能についても、エンジンフードの骨格を見直すなどの対策を実施。J-NCAP*4の衝突安全性能については、歩行者保護性能がレベル4相当であることを社内試験で確認しています。

“気持ちよい走り”を満喫しながら “環境”を考える新しいクルマを実現



特集4 | 地球にやさしいクルマづくり

新型フォレスターの環境性能

2007年末、3代目として登場した新型フォレスターの開発テーマは「空間と走りと環境性能」です。なかでも環境性能については、大幅な「燃費の向上」と「排出ガスのクリーン化」を目標としました。初代フォレスターが誕生してから丸10年。メモリアルイヤーを飾るにふさわしいクルマの具体的な特長と開発の目的、過程をご紹介します。

“エコロジー”でも選ばれる クルマを追求しました



スバル商品企画本部
プロジェクトゼネラルマネージャー
市川 和治

「世界的なエコロジー意識の高まりとともに、人々の自動車の環境性能に対する目はますます厳しくなっています。そんな中、パワフルで重厚感のあるSUVといえども、環境性能は無視できません。その理由としては、パワフルで重厚感のある車種が多いことが考えられます。そこで私たちはSUVならではの魅力を活かしつつ、エコロジーという視点からもフォレスターを選んでいただけのレベルにまで環境性能を高めることを目標に研究開発に取り組みました。

燃費、排出ガスを考えるうえで重要な鍵を握るのはエンジンです。新型フォレスターは従来モデルに比べボディのサイズをひとまわり大きくしており、単純に考えれば燃費や排出ガスといった環境への負荷は高くなります。それをリカバリーするだけでなく、各数値を低減するべく思い切った改良を実施。基本はレガシィと同型式のエンジン「EJ20型」ですが、大部

分の部品を新設計しています。

燃費向上に大きく貢献したのが、スバルにおいて小型系初の導入となったNA車の電動パワーステアリング(パワステ)*5です。開発に当たってはスバルの持ち味である走りのよさを犠牲にしないこと、つまり油圧パワステ同様の操舵フィーリングに気を配りました。電動パワステの採用により、モード燃費で約2%もの向上に成功。操舵感も非常に満足度の高い仕上がりとなりました。この“気持ちよい走り”と地球環境の融合は、新中期経営計画にも対応するものです。

その他車体の軽量化、タイヤの転がり、各動力系統の摩擦低減などを徹底。結果として、燃費は自然吸気(NA)車で13.8km/ℓ、ターボ車で13.0km/ℓを達成。クラストップレベルの数値であると自負しています。また触媒の位置を工夫して、排ガス性能も4つ星を獲得しています」



スバル技術本部
シャシー設計部 機構設計第1課
大岩 博之

**燃費も運転フィーリングも
油圧を超えた電動パワステを
開発しました**

「燃費の向上」と「走りのスバル」の両立を目指し、スバルの小型系としては初となる電動パワステを新型フォレスターに導入しました。もちろん先行開発は行っていましたが、今回の導入に関しては、「走りのスバル」の実現と、従来の油圧パワステのフィーリングを超えることを目標に研究実験部門と協力して徹底的な走り込みを実施。私はパソコンを膝に乗せて助手席に座り、チューニング作業に専念しました。0.1アンペア単位の電流の差でも操舵する感覚に違いが生じるので、油圧パワステを超えるという目標に対して自信が持てるまで調整を繰り返した結果、走行距離は三日間で延べ千キロに…。頑張ったかいあって、発表試乗会では、辛口のジャーナリストから「油圧よりもいいね」と評価されました」

エアロダイナミクス

高速走行時に大きく影響する空力特性は、SUVとしてはハイレベルなCd値0.36*を実現。燃費・静粛性の向上や走行安定性に貢献しています。
(*一部車種を除く)

車体軽量化

安全装備などの付加により通常なら従来モデルより70~80kg増となるところを、細かいところの最適化や、高強度鋼材の多用などの工夫を施すことで30kgの増加に抑えています。



駆動系

ベアリングなど各部の低フリクション(摩擦)化、ブレーキ引きずりの改善、タイヤのころがり性の向上など車の根本的な見直しにより燃費向上を図っています。

**SI-DRIVE
(ターボ仕様車)**

ドライバーが望む走りに対応する3種類のモードを設定し、スイッチひとつで切り替えられる仕組みで、まるで3種類のエンジンを備えているかのような走りを感じられます。最も燃費がよいインテリジェントモードは市街地や高速道路での通常時のクルージングに適しているのので、ほぼ常時、環境に配慮した運転が可能です。

**環境対応
新DOHCエンジン**



スバル技術本部
パワーユニット研究実験第一部
主査

砂口 豊秀

NA、ターボともに大幅にチューンナップしました

「低燃費と低排出ガス、高トルクを両立するべく、従来モデルでSOHCだった自然吸気(NA)エンジンをDOHCに改めました。ベースはレガシィに搭載されているタイプですが、これは高回転・高出力型でハイオク仕様。新型フォレスターでは低回転・高トルク、レギュラー仕様とするため、ほとんどの部品を見直しました。ターボについても低回転・高トルクで扱いやすい特性を狙い、ほぼすべての部品を一新しています。さらにエンジン、トランスミッションのコントロールユニットも念入りにチューニングを行っています。かなり高いレベルの燃費目標であったため、スムーズな開発ではなく日程との勝負となりましたが、生産部隊も含む社内が一丸になった取り組みにより開発期間を確保し、ようやく満足できる数値までこぎつけたのです」



クルマを“一緒に地球環境を考えるためのツール”に

「深刻化する地球温暖化問題を考えるとハード面での燃費向上はもちろん、クルマとのコミュニケーションを通じてドライバーにもつねに環境を意識した運転を心掛けてもらいたい…。そんな思いから全車に平均燃費計やInfo-ECOモード**6(AT車)を装備しました。これによりドライバーはクルマと対話しながら、地球環境に優しいアクセルワークを行えます。

こうした目に見える環境アイテムには、「クルマを通して、私たちスバルとコミュニケーションを図り、一緒に環境問題を考えていきましょう」とのメッセージが込められています。ドライバーだけでなく同乗される方にも、さりげなく環境への配慮を意識してもらえるのではないのでしょうか。新型フォレスターに接することをきっかけに、より多くの人々が、ふだんの暮らしの中でもエコロジ

カルな過ごし方を心掛けるようになっていただければ、これ以上の喜びはありません」

スバル商品企画本部
主査
守田 尚義



※1 VDC：ピークダイナミクスコントロール。横滑りなどクルマの不安定な挙動を抑えるシステム。
 ※2 ABS：アンチロック・ブレーキングシステム。ブレーキング時のタイヤロックを防ぎ、タイヤのグリップ力を最大限に引き出すシステム。
 ※3 ヒルスタートアシスト：坂道での発進時、ブレーキペダルから足を離してもブレーキ力を一時的に(約1秒間)キープ。スムーズな坂道発進を可能にする。
 ※4 J-NCAP：自動車アセスメント。各メーカーが販売している車について、同条件で衝突試験などを行い、結果を公表するもの。
 ※5 電動パワステ：モーターによってステアリング操作をアシストする機構。
 従来のパワステのようなエンジン出力の一部で駆動する油圧ポンプが不要となり燃費が向上する。
 ※6 Info-ECOモード：各種の制御を行うことで燃費を向上させるATのモード。燃料消費率の良い走行時にECOランプが点灯して知らせる。

商品開発での取り組み

地球温暖化、CO₂削減、自然環境……

これらの文字がマスコミ、インターネットなどのメディアで取り上げられない日はありません。今や世界の最大関心事といえるでしょう。

ところで私たちは文明・文化の成功・発展を自らがつかんだものと考えていますが、それらの幸福を美しい自然環境と単に引き換えただけなのかもしれません。今、スバルは地球を美しい自然環境を取り戻すため商品開発、生産、物流などあらゆる段階で地球温暖化防止に取り組んでいます。

ここでは、そのいくつかの取り組みをご紹介します。

期待が集まる 大型風力発電システム

大型風力発電システム開発の背景

地球全体の温室効果ガス削減が求められるなか、エネルギー資源のほとんどを輸入に頼る日本は、率先して低炭素社会づくりに取り組まなくてはなりません。そこで重要となってくるのは再生可能な自然エネルギー、その代表格である風力発電の利用拡大です。

しかし風力発電の拡大には時々刻々変化する風からの不安定な発電への対応、台風・落雷・地震など日本独特の厳しい自然環境への対応、そして景観や騒音、鳥類保護などへの対応など数多くの課題が存在しています。こうした課題を解決し、効率的に安定した発電を行なう日本向け大型風力発電システム(風車)の開発が求められていました。

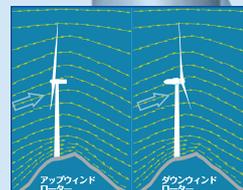
技術革新のチャレンジで 地球環境に貢献

中小型風車で実績を積み上げてきたスバルは、こうした課題に挑戦するべく2003年に当時国内最大の出力(2000kW)を持つ「SUBARU80/2.0風力発電システム」の開発に着手。手探りでの開発に苦労しながらも、2005年に大型風車としてユニークなダウンウィンド方式の採用などを特長とする試作機の設置を達成。さらに

当社の大型風力発電システムの特長と他社に対する優位点

1. 風下にローターを向けるダウンウィンド方式の採用

日本の地形にマッチした風車として、ダウンウィンド方式を採用しました。風上にローターを向けるのが一般的ですが、山岳や丘陵などの立体地形では吹き上げ風が多く、ダウンウィンド方式は効率よく風の力を吸収します。

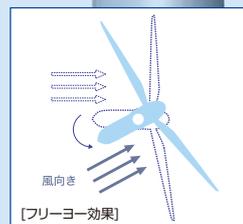


2. 耐雷性能の強化

世界的にも稀な日本の強い雷にも耐えうる強度を持たせ、世界基準を越える最高レベルを標準装備としました。

3. 安全装置(フリーヨー効果)

ダウンウィンド風車は、風見鶏のように自然と風下にローターを向けるフリーヨー効果があります。暴風雨等の場合、自然に風を受け流すことができようになり、万一の停電時にも安全は確保されています。



4. 建設作業の容易化

ナセルを分割して、組み付けることが可能であり、クレーン等も従来品に比べ小型で対応できます。また、ブレードも上空でナセルに組み付けることができ、地上でのスペースが狭くても組み立てが可能となります。

2007年、量産初号機を無事納入することができました。ここに、スバル風力発電システム事業の新たな歴史が始まったのです。

日本のような限られた国土の効率的な利用を図るために、より一層の風車の大型化や、建設の適地を求めた洋上利用などがこれからの技術として大いに期待されています。

スバルは、風力発電を通じて地球温暖化問題解決に貢献すべく、これからもたゆまない技術革新にチャレンジしていきます。

世界に類を見ない特徴的なエンジン

地球温暖化対策のため、全世界的に自動車燃費の改善が求められています。特に欧州では優れた燃費性能に加え力強い走りが支持され、乗用車販売台数の半数以上がディーゼル乗用車となっています。

スバルも大幅なCO₂排出量低減、燃費性能の向上を実現し、またコア技術であるボクサーエンジン*1+シンメトリカルAWDの持つ特長をさらに高めて、お客様にスバルならではの爽快な走りと環境対応技術を同時に提供することができる、世界初の乗用車用ボクサーディーゼルエンジンを開発しました。

そして2008年3月、このエンジンをレガシィ、アウトバックに搭載して欧州市場で販売を開始しました。

従来車と一線を画すスバルならではの走り

手本とすべきエンジンがない中、ボクサーガソリンエンジンで培ってきた技術と数々の最新技術を融合し、独自に開発を進めてきました。いくども困難に直面しましたが、開発者自らが強く実感していた「ボクサーディーゼル+シンメトリカルAWD」の優位性、従来のディーゼルエンジンとは一線を画す走行フィーリングを少しでも早くお客さまに味わっていただけるよう、短期間での開発を実現しました。

水平対向エンジンは、その機構上ピストンの動きによる振動が非常に小さいことが大きな特徴で、同クラスの他のディーゼルエンジンのほとんどが装備している、振動を打ち消すためのバランスシャフトが不要となりました。これにより摩擦抵抗が小さく軽量コンパクトで、燃費性能とエンジン

レスポンスに優れた、環境性能と走りの楽しさを両立したエンジンが実現しました。

AWDセダンでCO₂排出量148g/kmはAWD車としてはトップクラスの燃費性能です。ディーゼル車のシェアが高い欧州市場において、スバルボクサーディーゼル搭載車が高く評価されています。



乗用車用 ボクサーディーゼル

従来車より約2倍の走行距離を達成

自動車にとって豊かな未来、それは化石燃料を浪費せず、CO₂の排出や排出ガスを減らすことで地球環境への影響を最小限にとどめた乗り物となること。

スバルは、その実現のために風力発電など再生可能な自然エネルギーが活用できる電力を動力源として使い、さらに走行エネルギーを減速時に電力として回収(回生)できる電気自動車が理想と考えています。

スバルでは1990年代半ばよりハイブリ

ッド車などの開発に取組み、試行錯誤を繰り返してきました。

こうしたなか、リチウムイオン電池の目覚ましい進歩を契機に、エンジンを持たずもっともシンプルで高効率なシステムが期待できる電気自動車(EV)の開発に舵を切りました。

そして、ついに通常のガソリン車と比較して驚異的な高効率を達成した電気自動車、R1eを開発しました。

すでに公道での実験をスタート

R1eは走行時にCO₂を排出しないことに加え、騒音も非常に小さく、都市環境にもやさしい車といえます。

家庭用コンセント

にプラグを接続するだけで手軽に充電でき、また急速充電器を使用すれば15分で80%の充電が可能で、高い利便性を持っています。また一般のガソリン車に比べ大幅に低いランニングコストを実現しました。

2006年6月から東京電力株式会社と共同して40台のR1eが公道で実証試験を開始。2007年9月からは、神奈川県庁とも共同実証を開始しています。これらの試験で得られた貴重なデータにより、便利で快適に使える電気自動車の姿が明らかになってきています。

スバルでは、自動車にとって豊かな未来、電気自動車が生活の中に溶け込むような社会の実現を目指し、さらなる性能の向上、充電ステーションや道路環境などのマッチング、コストの適正化などに取り組んでいきます。

電気自動車 開発の思想



*1 ボクサーエンジン：水平対向エンジンの別称。

スバルグループにおける さまざまな取り組み

ここでは、関係会社も含めたスバルグループの2007年度に実施した地球温暖化防止への取り組みをご紹介します。

生産段階での取り組み

群馬製作所 矢島工場に天然ガスコージェネレーションシステムを追加導入

群馬製作所矢島工場では、2007年6月に天然ガスコージェネレーションシステムを1基追加導入しました。このシステムの導入により年間約8千tonのCO₂排出量削減と原油換算約1,800klの省エネルギーが見込まれています。



矢島工場には2002年にも天然ガスコージェネレーションシステムを1基導入しており、今回導入分とあわせると矢島工場のCO₂排出量を1990年比約29%削減につながります。

当社では、群馬製作所大泉工場に2基、宇都宮製作所本工場に1基、合計5基の天然ガスコージェネレーションシステムが稼働しています。

代替フロン(HFC134a)の 大気放出量の低減活動

群馬製作所の自動車生産ラインでは、エアコンガス(冷媒)として使用されている代替フロン(HFC134a)の大気への放出量を削減するため、これまでにエアコンガス注入時や回収時の漏れを極小化する取り組みを重ねてきました。その結果、2003年度からは1996年度実績に対して95%以上の大気放出量削減を達成しており、2007年度は2006年度に引続き約97%の削減を達成しています。

また温室効果のより少ない代替冷媒の研究も進めています。

地球温暖化防止部会活動

当社には、CSR・環境委員会^{*1}の下部組織として生産段階の地球温暖化防止を推進する「地球温暖化防止部会」があります。この部会は各事業所・カンパニーに事務局を置き、日々生産段階の地球温暖化防止を進めています。また、3ヶ月に1度会合をもち、事務局間の情報共有をはかっています。

2007年度は、CO₂排出量を2006年度比で約9千ton削減しました。

今後も、業務プロセス改善に向けた活動をさらに加速させていながらCO₂排出量削減と省エネルギー活動を実施していきます。



スバルグループの その他の取り組み[生産段階]

- ◇塗装ブース温度最適化
- ◇休日送電停止
- ◇工場物流配膳改善
- ◇休日出勤削減
- ◇建屋断熱工事
- ◇屋根の断熱塗装
- ◇積算電力計取り付け
- ◇重油ボイラの天然ガス化
- ◇コンプレッサーのインバータ化
- ◇暖房の天然ガス化
- ◇空気配管エア漏れ防止
- ◇冷却水の循環化(揚水量削減)
- ◇変電所の力率改善
- ◇照明の高効率蛍光灯化

オフィスでの取り組み

新宿本社ビル屋上のSUBARU 広告塔をLED化

◇東京都新宿区にある当社スバルビル屋上に設置されているSUBARUの広告塔をネオン管照明からLED照明に変更しました。この効果として省エネルギーのほか年間18tonのCO₂削減効果を見込んでいます。



◇SCI (Subaru Canada, Inc) では1988年から省エネルギー性の高い広告塔の検討を進めています。関係会社のSOMI (Subaru of Mississauga) では、2007年9月にSUBARU広告塔をLED照明に変更し、省エネルギー・CO₂排出量削減を進めました。(電力を40%削減)



スバルグループの その他の取り組み[オフィス]

- ◇窓に熱線吸収フィルム貼付け
- ◇冷暖房温度管理徹底
- ◇階段・通路照明の人感センサ連動化
- ◇エコオフィス活動の推進
- ◇不要照明の消灯
- ◇自動販売機の夜間停止

物流段階での取り組み

当社全物流量の約6割を占めるスバル車(完成車)の国内輸送の取り組みについてご紹介します。

モーダルシフト

スバル車は組立工場のある群馬地区から全国の販売店に輸送されていますが、このうち仙台以北と大阪以西への輸送に関しては、よりCO₂排出量の少ない海上(船舶)輸送を利用しています。2007年度の国内完成車輸送に占める海上輸送の比率は43.2%^{※2}となっています。



共同輸送

当社では同業他社とともに、双方の完成車を運んだ帰りのキャリアカーで相手の完成車を運ぶことで空荷での回送がなくなる共同輸送の取り組みを進めています。2007年度の共同輸送取扱量(他社への委託台数と他社からの受託台数の合計)は40,678台となっています。

取り組みの成果

こうした取り組みを推進することで、物流におけるエネルギー消費量やCO₂排出量の削減を進めています。

富士重工業全社の物流におけるエネルギー使用量原単位とCO₂排出量

年度	エネルギー使用量 売上高原単位 (原油換算k ₂ /百万円)	CO ₂ 排出量 (ton-CO ₂)
2006年度(基準年)	0.00972	24,900
2007年度	0.00843	22,800
前年比	86.7%	91.6%

スバルグループの その他の取り組み[物流]

- ◇輸送ルート最適化
- ◇積載効率の向上
- ◇トラックへのデジタルタコグラフ取り付け
- ◇エコドライブ講習会
- ◇海上コンテナの他社とのラウンド使用
- ◇航空輸送のトラック輸送化

※1 CSR環境委員会: P36 参照

※2 工場出門台数ベース。海外への輸出台数は含まず。



Message



代表取締役専務執行役員
CSR・環境委員会委員長

高木俊輔

現在推進しております新中期経営計画の経営ビジョンとして「社会的責任を全うする企業」を掲げております。

この経営ビジョンの具現化に向け、2007年度から環境マネジメントシステムと同様にCSR^{※1}に関しても全社レベルで活動のPDCAを回し、レベルアップを図るマネジメントの仕組みとしてCSR・環境委員会を新たに設けました。

このCSR・環境委員会は、これまで実施していた環境活動のトップマネジメントに加えて、CSR活動に関してもトップマネジメントによるレビューが可能な全社レベルの委員会といたしました。

2007年度は、これまで個別に活動してきた各製作所、事業所の活動の確認、整理を進め、体系化を図るとともにステークホルダーの視点を踏まえてスバルのCSR活動計画の見直し、見える化を図りました。

また2006年度に引き続き第2回となるCSR社内意識調査を行い、CSRに関する改善課題を把握することができました。2008年度は、これらの課題に対処するためCSRの考え方、活動に対する理解の啓発、浸透を図って、グループ共通のCSR活動3つの柱(1.環境活動 2.交通安全活動 3.地域貢献活動)を定め、一人ひとりの日常活動への落とし込みを行います。

さらに、スバルグループのグローバルな活動へと展開を図ってまいります。

企業理念 Corporate Philosophy

スバルのモノづくりの思想は、前身である中島飛行機時代から受け継がれてきた航空機づくりの伝統の上に築かれています。航空機設計の基本思想である「最高の性能の追求」とそれを実現する「凝縮された無駄のないパッケージ」、さらに「あらゆる環境下での安全思想の徹底」がスバルのDNAです。こうした伝統を大切にしながら新たな価値創造にチャレンジし、環境問題やコンプライアンスなどへも積極的に取り組み、社会との共生・調和を念頭におき、お客さまをはじめとするすべてのステークホルダーの皆さまの満足と信頼を得られる企業を目指します。

- ① 私たちは常に先進の技術の創造に努め、お客さまに喜ばれる高品質で個性のある商品を提供します。
- ② 私たちは常に人・社会・環境の調和を目指し、豊かな社会づくりに貢献します。
- ③ 私たちは常に未来を見つめ国際的な視野に立ち、進取の気性に富んだ活力ある企業を目指します。

スバルのありたい姿を目指して

当社は「存在感と魅力ある企業」というありたい姿に向かって、2007年度から2010年度の新中期経営計画を策定し、取り組みを進めています。

新中期経営計画では、ややもすると技術重視に偏りがちであった当社の社内基軸を、原点である「お客さま第一」に立ち返り見直しています。商品面では水平対向エンジン搭載車をコア領域として、ドライバーのみならず同乗者全員が愉しめる「新しい走り」と、全世界の環境・CO₂問題への対応を両立する技術開発を進めます。また、これまで以上にお客さまのご要望を商品に反映させる体制や国内外の販売・サービスの体制を充実させるとともに、トヨ

タグループとのアライアンス効果を活かしながら商品ラインアップの拡充を行い、お客さまの満足向上に努めます。さらに、「新三つの尺度」^{※2}をベースに社内およびグループ全体での議論を活性化しながら、教育をはじめとする人材育成に力をいれ、継続的な発展の源である企業活力を醸成してまいります。

こうした活動を一步一步着実に推進して未来に向けて進化を続けることにより、すべての事業領域において従業員が誇りを持って働く企業の模範となると同時に、全世界のお客さまに支持されるブランドを築いていくことが私たちの夢であり願いです。

※1 Corporate Social Responsibility : 企業の社会的責任。

※2 「新三つの尺度」: 「お客さまのためになるか」「グループの発展に役立つか」「従業員の成長に役立つか」の3つの判断尺度。

CSR取り組み概要



企業行動規範

当社では企業理念に基づいた事業活動の実践に向けて、コンプライアンスを順守し社会的責任を果たしながら行動していくための企業行動規範を定めています。社員一人ひとりがお互いを尊重

しながら、この企業行動規範を尊び同じ価値観で行動することを通じて、豊かな社会づくりに貢献しすべてのステークホルダーに信頼される企業となるべく努力を続けてまいります。

- ① 私たちは、環境と安全に十分配慮して行動するとともに、創造的な商品とサービスを開発、提供します。
- ② 私たちは、一人ひとりの人権と個性を尊重します。
- ③ 私たちは、社会との調和を図り、豊かな社会づくりに貢献します。
- ④ 私たちは、社会的規範を順守し、公明かつ公正に行動します。
- ⑤ 私たちは、国際的な視野に立ち、国際社会との調和を図るよう努めます。

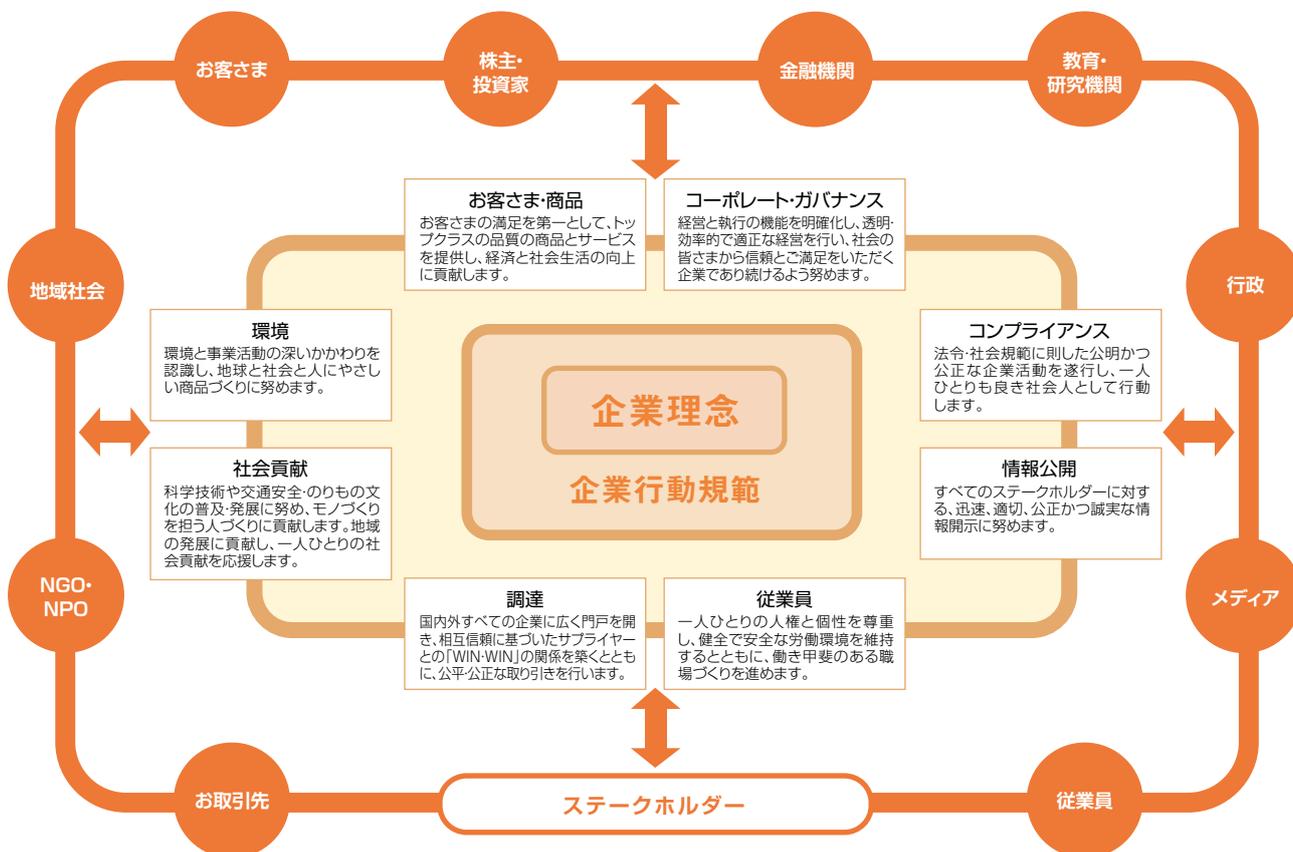
CSR方針と経営ビジョン

スバルは、CSR(企業の社会的責任)とは企業理念の反映であり、企業活動そのものであるとらえ、「企業理念」がすなわち「CSR方針」であると考えています。

新中期経営計画の経営ビジョンのひとつとして「社会的責任を全うする企業」を掲げました。これは、当社の長期ビジョンである

「存在感と魅力ある企業」を実現するための必要不可欠な基本事項で「すべてはお客さまのために」という基本方針と併せて、さまざまなステークホルダーの皆さまから信頼される企業を目指して持続的な社会発展へ貢献するとともに企業価値の向上を図ってまいります。

■ステークホルダーとのかかわり



CSR取り組み概要

企業価値の向上を図り、存在感と魅力ある企業に

2007
POINT

- ① CSR・環境委員会を設置し、トップによるマネジメントを開始しました。
- ② 「環境活動・交通安全活動・清掃活動」の3つの柱をグループ共通のCSR活動項目と決めました。
- ③ 2007年度の活動やアンケート結果を踏まえ、改善に向けたアクション項目を活動に組み込んで推進してまいります。

2007年度の活動振り返りと2008年度の計画

2006年度から組織的な対応を開始、現状・課題把握、活動整理・立ち上げ、活動推進の3つのフェーズに分けてCSR活動を進めています。

■ 活動概要

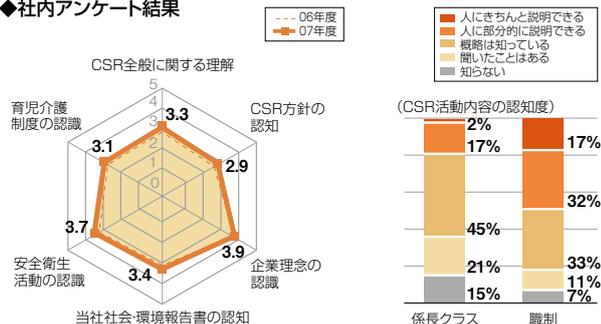
2006年度の社内のCSR活動改善課題(①従業員個々の行動がCSRに結びついているという意識を高めること②CSRに関する情報の共有、調整、展開、集約を効率的かつ合理的に行う仕組みの構築)に対して、研修機会の拡大、各製作所・事業所における活動の整理を図るとともに、ステークホルダーの視点を踏まえて活動計画の見直しと「見える化」を図りました。さらに、総合環境委員会をCSR・環境委員会に改組し、EMSに加えてCSRについてもトップによるマネジメントを開始しました。

■ 社内アンケート

2006年度に引き続いてCSR社内調査およびヒアリング調査を行い、自社のCSR活動に対する改善すべき事項を次のように明らかにすることができました。

- ①分析…ほぼ前年度と同じ傾向で、残念ながら大きな意識の変化は見られなかった
- ・「企業理念」=「CSR方針」であることの浸透度が低い
 - ・CSR活動の説明ができるレベルに至っていない(職制49%、係長クラス19%と改善が必要)
- ②課題…「企業活動がCSRそのものである」という考え方のさらなる浸透が必要である
- ・教育・研修機会の拡大を通じて、CSR方針の啓発を図り、理解と関心を高める
 - ・全社共通のCSR活動項目を策定し、一人ひとりの日常活動への落とし込みを図る

◆ 社内アンケート結果



■ 2008年度の取り組み

CSRとその重要性を社員一人ひとりが認識し、企業市民として社会に貢献するために「環境活動、交通安全活動、清掃活動」の3つの柱をスバルグループ共通のCSR活動項目と決めました。

また、2007年度の活動や社内アンケート結果を踏まえ、改善に向けたアクション項目を2008年度の活動に組み込んでCSR活動を推進してまいります。

◆ スバルグループCSR活動の3つの柱

共通活動項目	考え方	具体的内容
環境活動	事業活動のみならず日常生活における環境影響を理解してできることから推進を図る。家庭における地球温暖化対策推進として省エネルギー活動の啓発推進を図る。	チームマイナス6%への参加、家庭における環境活動推進、グループ企業の取り組み推進
交通安全活動	輸送機器メーカーとしての責任を強く認識して世の中の交通事故削減のために努力する。交通違反と交通事故(加害)をゼロに努める。	安全運転教室の実施、自治体との連携、公共交通機関の利用推進
清掃活動	事業活動を行ううえで重要なパートナーである地域社会への貢献に努める。	事業所周辺清掃、自治体との連携、地域イベント支援

◆ CSR活動計画

フェーズ	現状・課題把握	活動整理・立ち上げ	活動推進
年度	2006年度	2007年度(実績)	2008年度(計画)
課題項目	従業員個々の行動がCSRに結びついているという意識を高めること	①人事新任管理職研修へCSR講義の組み込みを図った ②グループの取り組み推進の一環として北米関係会社へスバルのCSR概念を紹介した ③EMSの仕組みを活用したCSR活動の推進を試行した(本社)	①各製作所で実施している階層別教育等への展開を図る ②北米関係会社においてCSR活動の体系的な推進を図る ③スバルグループ共通の活動項目の展開を進める
	CSRに関する情報の共有、調整、展開、集約を効率的かつ合理的に行う仕組みの構築	①総合環境委員会をCSR・環境委員会に改組し、EMSに加えてCSRについてもトップマネジメントを開始した ②各製作所に代表者を設置して全社横断的組織を構築した ③全社のCSR活動の棚卸しと活動計画の策定を実施した	①CSR・環境委員会においてCSRおよびEMSのトップマネジメントの徹底を図る ②製作所の代表者による全社横断的組織の活性化を図る ③スバルグループ共通のCSR活動の3つの柱に加え、地域貢献を主体とした製作所のCSR活動の推進を図る



ステークホルダーの皆さまから満足と信頼を得るために

2007
POINT

- ① 監査体制の強化を図り、経営の透明性を高めるために公正かつタイムリーな情報開示を実施してまいります。
- ② グループ全体での内部統制システムの整備と強化を進めております。

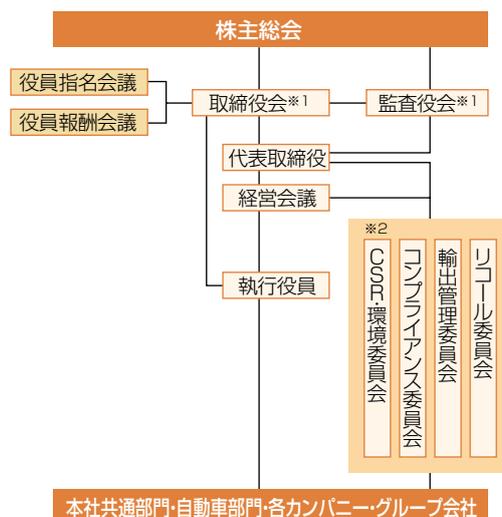
基本的な考え方

当社は企業理念に基づき、株主の皆さま、お客さまをはじめとするすべてのステークホルダーの皆さまの満足と信頼を得るべく、コーポレート・ガバナンスの強化を経営の最重要課題として取り組んでおります。

1999年6月、執行役員制を採用し各事業の管理執行責任を明確にしました。

また、2003年6月から取締役・執行役員の任期を2年から1年に短縮し、2004年6月には取締役会の決議に基づき、役員候補者の選定を行う役員指名会議と、同じく役員の報酬、業績考課などの決定を行う役員報酬会議を設置しております。

これらの諸施策により、経営と執行の機能を明確にし、意思決定の迅速化を図り、効率的な経営を目指しております。一方、監査役会は監査役4名により構成され、監査に関する重要な事項について報告を受け、協議を行っています。今後は、監査体制の一層の強化を図るとともに、経営の透明性を高めるために公正かつタイムリーな情報開示を実施してまいります。



社会性報告

コーポレート・ガバナンス
CSR取り組み概要

内部統制システム構築

■ リスク管理の強化

グループ全体での整備と強化を進めております

内部統制は、企業目的を達成するために欠かせない仕組みであり、経営者には、内部統制を構築するとともにその有効性と効率性を維持する責任があります。具体的には、各事業の横断機能を担う戦略本部を中心とした本社共通部門が各部門、カンパニーと密接に連携して、リスク管理の強化を図っております。また、監査部が各部門およびグループ各社の業務遂行について計画的に監査を実施しております。さらに、当社では、内部統制システムの整備に資するため、リスク管理の最も基礎的な部分に位置づけられるコンプライアンスの体制・組織を整え、運用しております。また、

2007年2月15日に金融庁企業会計審議会から公表された「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準」に対応し、

1. 業務の有効性・効率性
2. 財務報告の信頼性
3. 事業活動にかかわる法令等の順守
4. 資産の保全

を図るため、グループ全体での内部統制システムの整備と強化を進めております。

※1 取締役会は8名で構成されています。また、監査役会は4名で構成されていますが、社外監査役を2名おくことで経営の監視を客観的に行っています。(2008年6月25日現在)

※2 2007年5月29日以降、CSR委員会と総合環境委員会を統合し、CSR環境委員会として運営しております。

コンプライアンス

経営の基盤であり、最重要課題のひとつ

2007
POINT

- ① コンプライアンス・ホットライン制度をさらに使いやすい制度に向上させました。
- ② 2007年度には、約2,700人がコンプライアンス研修・実務法務研修に参加しました。
- ③ 関係会社や特約店に研修講師を派遣し、グループコンプライアンスの推進に取り組んでいます。

基本的な考え方

基本方針

スバルのコンプライアンスの基本方針は、次のとおりです。『当社は、コンプライアンスの実践を経営の最重要課題の一つと位置づけ、全社的なコンプライアンスの徹底が当社の経営の基盤を成すことを強く認識し、企業活動上求められるあらゆる法令・社内諸規定等の順守はもとより、社会規範に則した公明かつ公正な企業活動を遂行する。』

■ 企業行動規範と行動ガイドライン

当社は、コンプライアンスを実践するための順守基準として、「企業行動規範」と「行動ガイドライン」を定めています。これらは全社員が所持している「コンプライアンスマニュアル」で詳細に解説されており、日常の行動の中での徹底を図っています。



コンプライアンス
マニュアル

体制と運営

■ コンプライアンス規程

当社は、2001年に、コンプライアンスに関する当社の体制・組織および運営方法を定めた基本規程として、「コンプライアンス規程」を取締役会の承認を経て制定しました。

■ コンプライアンス体制・組織と運営 継続的・計画的な自主活動

コンプライアンスを推進する全社的な委員会組織として、「コンプライアンス委員会」を設置し、重要なコンプライアンス事項に関する審議・協議・決定、情報交換などを行っています。また、各部門は、それぞれコンプライアンス推進のための実践計画（コンプライアンス・プログラム）を毎年度策定し、継続的・計画的な自主活動を進めています。

■ コンプライアンス・ホットライン制度 外部事業者による通報受付窓口を追加

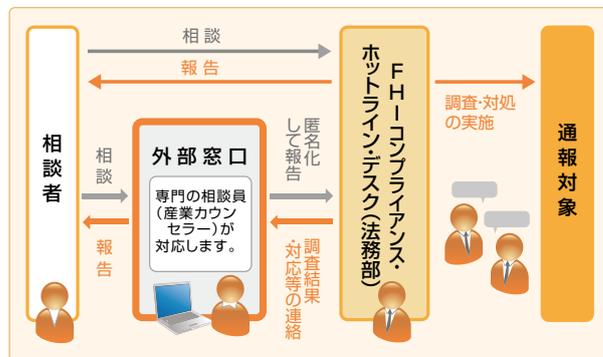
当社は、グループ企業等で働く社員等がグループ内のコンプライアンスに関する問題を発見した場合に、直接「ホットライン・デスク」にその旨を報告できるバイパス的な情報伝達ルートとして、「コンプライアンス・ホットライン」を設置しています。

「ホットライン・デスク」は、当社内に設置されており、規則に基づ

いて任命された社員が、郵送・電話・Eメールによる通報を直接受け付け、事実調査や対応にあたります。通報者の所属・氏名は、通報者の同意がない限り厳格に秘匿され、通報したことにより不利益を受けることがないように十分配慮されます。

さらに、2008年4月から、この制度に外部事業者による通報受付窓口を追加し、受付時間の拡大と通報者の氏名・所属の秘匿性強化を図るなど、さらに使いやすい制度とするよう努めております。

◆ コンプライアンス・ホットライン（相談・解決の流れ）



コンプライアンス・
ホットラインカード



2007年度コンプライアンス活動実績概要

■ コンプライアンス教育、研修の実施

「ケーススタディ研修」を継続して実施

2007年度には、グループ企業の社員を含めて約2,700人が、法務部や人事・教育部門の主催するコンプライアンス研修・実務法務研修に参加しました。2006年度に導入した、身近な問題について受講者自身が考えて討議する形式の「ケーススタディ研修」には、約260人が参加してコンプライアンスの理解を深めました。また、各部門やグループ企業においても、それぞれの実践計画のもと、「コンプライアンス事例集『100選』」などのテキストを活用して、業務上重要な法令の勉強会やコンプライアンス啓発研修が開催されています。

また、当社グループのコンプライアンスの実践を推進するために、グループ会社に対し教育・研修の実施や社内刊行物による情報提供を行うとともに、当社内部通報制度(コンプライアンス・ホットライン)へ参加することにより、実効性を高めています。



コンプライアンス事例集
100選



コンプライアンスケーススタディ研修

■ グループコンプライアンスへの取り組み

関係会社や特約店に研修講師を派遣

コンプライアンスの徹底には、当社だけでなく、グループの企業全体が歩調を合わせて取り組む必要があります。このため、当社では、関係会社や国内スバル販売特約店を対象に、コンプライアンス研修の講師として弁護士や当社社員を派遣したり、テキスト類の作成・提供を行うなど、グループコンプライアンスの推進に取り組んでいます。



富士機械での顧問弁護士2名を招いての研修会

■ 個人情報保護への取り組み

全特約店共通の「個人情報ハンドブック」を作成活用

当社では、個人情報保護法施行にあわせて、社内体制や規程類を整備しプライバシーポリシーを公表するなどの取り組みを行ってきました。特に、国内スバル販売特約店では、お客さまの個人情報を直接かつ大量に取り扱うことから、特約店ごとに社内体制の整備を徹底するとともに、全特約店共通の「SUBARU特約店スタッフのための個人情報保護ハンドブック」を作成・活用し、社員一人ひとりが個人情報保護に関して正しく理解するよう努めております。



個人情報保護ハンドブック

すべてはお客さまのために

「お客さま第一」のさらなる向上を目指して

2007
POINT

- ① お客さま相談部門では、2007年度、お客さまからのご相談を約62,000件お受けしました。
- ② (株)J.D.パワー アジア・パシフィック社の日本自動車セールス満足度 (SSI) 調査で業界順位を上げることができました。
- ③ 「お客様第一推進部」の新設とともに、CS向上を図ることができました。

お客さま相談部門

■ お客さま相談部門の活動

「迅速・誠実・傾聴」を行動の基本に

スバルでは、お客さまからのお問い合わせやご相談、ご要望、ご指摘をお聞きする窓口として「SUBARU お客様センター」(お客様相談部運営)を設置しております。電話やEメールなどによる対応が主となることから、お問い合わせやご相談に対しては「迅速・誠実・傾聴」を行動の基本として、スピーディーかつ的確な対応を心がけています。

2007年度はお客さまからのご相談を約62,000件(前年度比105%)お受けしました。お客さまから寄せられた貴重なご意見、ご要望、ご指摘などは、社内の関連部署へフィードバックし、品質改善や商品提案、販売・サービスでの対応改善などでお客さまのご満足度を高めるために役立てております。

お客さまの声はスバルへのご期待でもあり、お客さま一人ひとりとのコミュニケーションを大切にしながら、常にご満足をいただけるよう真摯に対応を行ってまいります。

SUBARUお客様センター

SUBARUコール : 0120-052215

(内容確認のために録音させていただいております。予めご了承ください。)

SUBARUお客様センターでは下記の内容を承っております。

(1)ご意見/ご感想/ご案内(カタログ、販売店、転居手続き他)

(2)お問い合わせ/ご相談

受付時間 9:00~17:00(平日)

9:00~12:00、13:00~17:00(土日祝)

◆ お客さまからのご相談件数推移

年度	2003	2004	2005	2006	2007
実績件数(件)	46,000	60,000	59,000	59,000	62,000
前年度比	—	130%	99.7%	100%	105%

CS推進部門

■ CS推進部門の役割

お客さま満足度向上への取り組み

社内ならびにスバル販売特約店を含めたスバルチーム全体に対して、お客さま満足度を高めるための支援・推進活動を行っています。「スバルお客さまアンケート」などで得られましたお客さまのご意見を関連部署にフィードバックして、商品・品質・販売・アフターサービス等に反映させるとともに、スバル特約店でのお客さま対応がより良くなるよう現場でのチェック・指導を行っています。

■ 2007年度の活動実績

日本自動車セールス満足度 (SSI) 調査で業界中位にアップ

第三者調査機関である(株)J.D.パワー アジア・パシフィック社による日本自動車セールス満足度 (SSI) 調査では、2006年の10社中8位から、2007年は11社中5位まで順位を上げ業界中位に入ることができました。これは、2005年から継続して取り組んできた、販売特約店とメーカーが一体となったお客さま対応力向上の取り組みが実を結んだものと考えています。特に2007年4月からは、スバルカスタマーセンターにお客様第一推進部を新設するとともに、専任の現場サポートチームを結成し、全国統一の基本活動の徹底と個別の問題解決を行うことで、お客さま対応力の強化を図ってまいりました。

▶ P9 特集参照

■ 2008年度の取り組み

CS向上へのさらなる強化

自社で実施しているお客さま満足度調査(アンケート)の内容を、2008年4月から大幅に変更しました。お客さまにご満足いただける対応ができたかどうかの結果評価だけでなく、お客さまがどんな対応を望まれているのかを把握できる内容にし、すぐに改善に盛り込めるものとなりました。

6月にはお客様第一推進部のさらなる強化のため人員と機能を増強しました。特に販売特約店と一緒にあって改善にあたるディーラーサポートグループについては、新たに専任の主管を置くとともに、現場サポートチームを今までの6人から9人に増やし、よりきめ細かなフォローができるようにしました。また、ディーラーサポートグループ内に企画部門を設置し、サービス面における生産性の向上、対応力の強化について企画立案するとともに、成功ノウハウをグループ内で共有できる体制を構築しています。

さらに、日本国内だけではなく、海外特約店におけるお客さま対応を強化すべく、グローバルCS推進課内に新たに海外担当主査グループを設置し、情報収集とノウハウの共有を図っています。

■ 人材育成の研修施設

スバルアカデミー

2005年1月に東京都八王子市にオープンした「スバルアカデミー」は、宿泊施設(133室)、4輪シャシーダイナモメーター、試走路や低μ路※1などの設備を備えた研修施設です。ここでは、販売特約店の営業スタッフからメカニックの全職種にわたり、また新人から経営幹部までの計画的な育成が可能な教育プログラムを実施しています。さらに国内に限らず、海外からも特約店経営者や販売・サービスの管理責任者・インストラクターを受け入れ、グローバルな視点での人材育成施策を提供しています。

2007年度には、セールス研修4,360人、メカニック研修3,100人を含めて合計8,600人が受講しました。

研修の成果を実践することでお客さま第一のさらなる向上を図ってまいります。



スバルアカデミー外観

スバルの福祉車両「トランスケアシリーズ」※2

■ 福祉車両への取り組み

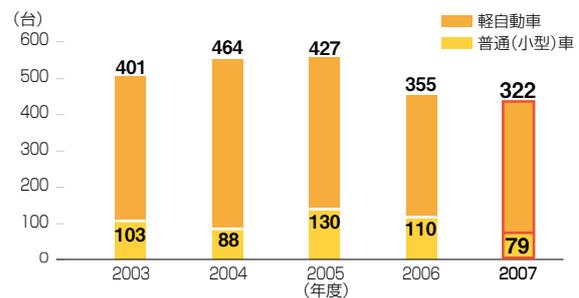
新型フォレスターもトランスケアシリーズ提供

当社では、福祉車両の製造販売を1982年より開始し、「トランスケアシリーズ」の名称で皆さまにご愛顧いただいています。トランスケアシリーズは、ステラ、サンバーなどのワゴンタイプの軽自動車から、レガシィなどの小型・普通車まで、幅広い選択肢を提供しています。2007年度はフルモデルチェンジを行ったフォレスターにトランスケア ウイングシート※3リフトタイプを設定。より多くのお客さまに、スバルの快適・信頼の新しい走りを提供できるよう、取り組んでまいります。



フォレスターウイングシート

◆トランスケアシリーズ販売台数



※1 低μ路：滑りやすい路面を再現した試走路

※2 トランスケア：英語の「Transportation(トランスポート=移動)」と「Care(ケア=介護・思いやり)」を組み合わせた造語で、スバルの福祉車両を総称するものとして1997年に商標登録しています。

※3 ウイングシート：助手席または左後席が回転し、スムーズな乗り降りをサポートできるシステムです。

すべてはお客さまのために

交通事故のない社会を目指して

2007
POINT

- ① インプレッサが「自動車アセスメントグランプリ07/08」※1を受賞しました。
- ② 優れたプリクラッシュセーフティ(衝突被害軽減)機能を備えた先進運転支援システム「EyeSight」※2を商品化しました。

安全なクルマづくり

■ 「安全なクルマづくり」の基本的な考え方 交通事故のない社会を目指した開発

スバルはお客さまに安心して乗っていただけるクルマの開発を最優先とした安全思想のもと、「快適・信頼の新しい走り」と地球環境の融合を商品開発の方向性と定め取り組んでいます。

安全に関しては、事故時の安全を確保する「パッシブセーフティ」と、事故を未然に防ぐ「アクティブセーフティ」の双方を高い次元でバランスさせることを目標として開発を進め、交通事故のない社会を目指した車両安全技術の開発に取り組んでいます。

■ パッシブセーフティの取り組み 自動車アセスメントグランプリを受賞

パッシブセーフティでは、スバルは全方向からの衝突に対し、常に高い衝突安全性を目指した開発を行っています。スバル独自の安全ボディ「新環状力骨構造ボディ」を採用し、全方向からの衝突に対して安全なキャビン(生存空間)を確保しています。また、自車の安全性能と相手車両に対する加害性低減を両立させるコンパチビリティ(相互安全)の安全思想を取り入れた開発、歩行者への被害軽減にも取り組んでいます。

これらの取り組みにより開発したインプレッサでは、2007年度

自動車アセスメント※3において衝突安全性能試験(運転席・助手席)および歩行者頭部保護性能試験とともに最高評価を獲得し、「自動車アセスメントグランプリ07/08」を受賞しました。



自動車アセスメントグランプリ07/08授賞式



■ アクティブセーフティの取り組み 先進安全自動車の開発

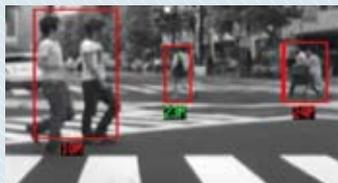
アクティブセーフティのためにはクルマの「走る」・「曲がる」・「止まる」の基本性能がドライバーの意思どおりになることが重要です。スバルではこれらの基本性能を磨きあげ、横滑り防止装置VDC(ビークル・ダイナミクス・コントロール)やBA(ブレーキアシスト)の装備拡大を図っています。さらに事故を生み出すさまざまな不安全要因をクルマ側が事前に認識してドライバーを支援する先進安全自動車の開発により、アクティブセーフティのさらなる向上に取り組んでいます。

先進運転支援システム「EyeSight」

アクティブセーフティの取り組みのなかで、スバルは世界に先駆けて運転支援システムADA(アクティブ・ドライビング・アシスト)を商品化し、2003年にはスバルのコア技術であるステレオカメラとミリ波レーダーとのセンサーフュージョンにより、さまざまな情報提供や警報によりドライバーの安全運転を支援するシステムを実用化してきました。

スバルではさらにADAを進化させ、プリクラッシュセーフティ(衝突被害軽減)を実現した先進運転支援システム「EyeSight」を商品化しました。「EyeSight」はステレオカメラのみで歩行者、自転車の検知を可能としたプリクラッシュブレーキ機能を有し、「速度ゼロ」「距離ゼロ」まで物体を認識することにより、世界初※4の15km/h未満の低速度域のプリクラッシュ制御を実現しました。また、AT誤操作による急発進事故の被害軽減機能を世界で初めて実現しました※4。

今後もスバルは交通事故のない社会の実現に向けて「事故をおこさないクルマ」の研究開発に取り組んでいきます。



ADAの歩行者認識イメージ

次世代ADA
新しい衝突被害軽減制御
(プリクラッシュ)の開発
・歩行者、自転車事故対応
・低速度域の事故対応
・誤操作による事故対応

2003年~2006年
全車速追従クルコン
先行車発進モニタ
ふらつき警報

1999年
追従クルコン
車間距離警報
車線逸脱警報

新ADAシステムによる
支援範囲拡大

※1 自動車アセスメントグランプリ07/08：衝突安全性能総合評価が運転席および助手席ともに最高評価の六☆および歩行者頭部保護性能評価についても最高のレベル5の評価を受けた自動車の中から最も評価結果の得点が高い自動車を自動車アセスメントグランプリとして選定。

※2 EyeSight：2007年10月に当社が発表した「次世代ADA(アクティブ・ドライビング・アシスト)」

※3 自動車アセスメント：国土交通省と独立行政法人自動車事故対策機構(NASVA)が、自動車の安全性能について評価を行い、結果を公表する自動車の安全情報公開。

※4 2008年3月現在当社調べ。



株主の皆さまとの双方向コミュニケーション

2007
POINT

- ① 公正な情報開示に努め、最新IR情報を提供しています。
- ② 工場見学会を実施し、103人の個人株主の皆さまにご参加いただきました。

株主の皆さまとともに

■ 富士重工業の経営状況(連結)と配当

2007年度は、
 売上高1兆5,723億円(前年同期比105.2%)775億円の増収
 営業利益457億円(前年同期比 95.4%)22億円の減益
 経常利益454億円(前年同期比107.6%)32億円の増益
 当期利益185億円(前年同期比 57.9%) 134億円の減益
 となりました。

このような状況の中で、配当につきましては、当社は長期的安定配当の基本方針に基づき、1株につき年間9円(中間期末4円50銭、期末4円50銭)とさせていただきます。

2008年度につきましては、前年度を上回るスバル車販売を目指し、全体の通期売上高は前年実績を上回る1兆6千億円を見込んでいます。利益面では、鉄鋼、原油、貴金属などの原材料の高騰や市況の悪化、大幅な円高などの影響を考慮して、それぞれ前年同期比減益となりますが、営業利益230億円、経常利益200億円、当期純利益100億円を計画しています。

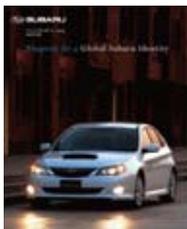
■ 情報公開

公正な情報開示とコミュニケーション

当社のホームページには、「株主 投資家の皆さまへ」のページを設けて、当社の最新IR情報を提供しています。また、各種IR資料(ホームページから全てダウンロード可能です)も用意しております。



最新IR情報は当社ホームページをご覧ください。
<http://www.fhi.co.jp/ir/index.html>



■ 個人株主の皆さまとともに

工場見学会の開催

当社では、2004年より毎年1回「株主さま工場見学会」を開催しております。2008年は、第5回として2008年3月20日(祝日)に103人の個人株主の皆さまにご参加いただきました。

当日は、太田市にある当社群馬製作所矢島工場ビジターセンターにお集まりいただき、工場の概要説明、スバル車生産工程見学、質疑応答などをさせていただきました。



当社役員による説明会



ビジターセンター見学



リサイクルラボ見学

◆株主さま工場見学会のアンケート結果

【好印象項目】	【ご指摘事項】
<ul style="list-style-type: none"> ・ 製造現場に見学者を迎え入れる姿勢を感じた ・ 質疑応答の際、役員が前列に並んだのはよかった ・ 車椅子でもカート対応で見学できてよかった ・ 自動車は従業員の労働の賜物と思うと大切にしたいと思った ・ 質疑応答が丁寧 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 工場内の説明が騒音でほとんど聞こえない ・ 工程の説明だけでなく、効率よく作る、安全などについても説明してほしい ・ もう少し環境対策の話が聞きたい ・ プレゼン資料を配布するか、説明時間を増やすかしてほしい ・ 生産工場、モノづくり提案改革を表面に出してください

社会とのかかわり

「良き企業市民」としての社会貢献活動

2007
POINT

- ① プライベートでボランティアに取り組んでいる従業員の表彰を継続して行っております。
- ② 2007年度には、103,260人もの皆さまに、スバルビジターセンターを見学していただきました。

社会貢献活動

スバルでは、CSRの取り組みのひとつの分野として、「社会貢献活動方針」を制定して、社会貢献活動に積極的に取り組んでいます。

社会貢献活動方針

私たちは、科学技術やのりもの文化の発展、交通安全の普及に貢献します。
私たちは、ものづくりの楽しさ、大切さや尊さを知る、人づくりに貢献します。
私たちは、私たちが活動する地域の発展に貢献します。
私たちは、一人ひとりもよき市民として、社会に貢献することを互いに応援します。

従業員一人ひとりの社会貢献意識を高めるため、さまざまなボランティア支援を行っています

■ ボランティア活動支援

従業員意識向上のための表彰制度

当社の社会貢献方針の第4項には「私たちは、一人ひとりもよき市民として、社会に貢献することを互いに応援します。」とあります。会社として寄付や、人を派遣したりすることはもちろん大切なことですが、私たち一人ひとりが社会貢献の大切さ、尊さを知ること、会社の社会貢献はより奥行きのある心のこもったものになる、という想いが込められたものです。

この考えを具体化するため、プライベートの時間を使ってボランティアに取り組んでいる従業員を、2006年度から会社として表彰しています。2007年6月には第2回ボランティア表彰として、やんべ はるみ山家春美さんが表彰されました。山家さんは、永年のボーイスカウト指導者としての活動と、63回にもおよび献血が評価されました。



表彰された山家春美さんと高木CSR環境委員長

■ 社内における活動

社員がだれでも気軽に参加できる活動

当社では、社員がだれでも気軽にボランティアに参加できるように、社内には使用済み切手・プリペイドカードなどの回収箱を設置し、集まったものをボランティア団体などに寄付しています。

また、群馬製作所総務部が中心となり飲料缶のプルタブを集めて車椅子と交換する活動も進めています。このたび2007年12月にはプルタブの回収量800kgを達成し、車椅子1台と交換することができました。今後、車椅子を必要としている施設に寄贈される予定です。

今後も2台目、3台目の車椅子獲得を目指し、活動を推進していきます。



プルタブと交換した車椅子と群馬製作所の従業員



交通安全普及のために

■ 交通安全普及の活動

社会実験プロジェクトに継続して参画

当社は、クルマが万一衝突した際に運転者や搭乗者、歩行者などの被害を低減する安全技術の開発はもちろんのこと、交通事故を未然に防ぐ新しい予防安全技術の開発についても注力しており、センサーとしてのステレオカメラ技術や車両制御技術の研究、商品化を進めています。▶ P27 TOPICS参照

こうした考え方に基づき、寒冷地域の冬季の交通事故予防、事故被害の低減を目指す社会実験に積極的に協力しており、秋

田、札幌でのプロジェクトに2006年度、2007年度と参画しています。^{※1}

また、当社各カンパニーおよび関係会社においては、自動車をはじめとした輸送機器およびその部品を開発・製造する会社の社員であることの自覚を促し、交通安全を啓発する勉強会・運転教室などを毎年開催しています。

 開催状況などにつきましては本誌34ページや2008社会・環境報告書Webデータ編に掲載しています

地域貢献活動

当社では地域社会との共生を目指して、地域行事に積極的に参加するとともに、催しものを継続的に開催して、地域の皆さまとの交流を図っています。

■ 群馬製作所スバルビジターセンター

見学会をととしてのコミュニケーション

スバルビジターセンターは、群馬製作所矢島工場内に2003年7月15日にオープンし、工場見学などで来訪されるお客さまにスバルの歴代のクルマや世界記録を樹立したクルマ、スバルの個性的な技術や環境への取り組みなどを展示し、紹介している施設です。2007年度には、地域の小学生を中心に103,260人もの皆さまに見学いただきました。

 見学無料、詳細は当社ホームページをご覧ください。
<http://www.subaru.jp/about/showroom/vc/index.html>



ビジターセンター外観



センター内スバル車展示場

■ 宇都宮製作所

旧引込み線を遊歩道として地域の皆さまに開放

地域貢献のひとつとして、本工場北側の旧引込み線跡地に、宇都宮市の協力を得て、市民に利用していただける遊歩道「歩行者・自転車専用道路」を開設しました。2008年4月4日には、宇都宮市長、南警察署長、近隣の11自治会長他、地域の方々に参加いただき開通式を行い、地区自治会長から感謝状と「スバルロード」と命名された看板を設置していただきました。



「スバルロード」看板



開通式

■ 桐生工業

関係会社における活動

関係会社各社におきましても、地域での貢献活動・清掃活動を積極的に実施しております。

桐生工業では、工場外周の学童通学路・線路脇の清掃活動を行っています。



桐生工業:2007年6月の環境月間に行った清掃活動



※1 社会実験の詳細につきましては、つるナビ専用ホームページよりご覧ください。
あきたつるる路面ナビゲーター ホームページアドレス:<http://tsurunavi.ce.akita-U.AC.jp/>

社会とのかかわり

■ 2007年度 主な地域貢献イベント・清掃活動の紹介

2007年度、スバルでは次のような地域貢献イベント・清掃活動を行いました。
今後も積極的に地域とのコミュニケーションを図ってまいります。

	事務所	地域貢献イベントなど	地域清掃活動など
富士重工業	群馬製作所	<ul style="list-style-type: none"> 矢島工場 スバル大感謝祭(来場者約35,000名) [10/1] 大泉工場 ふれあい感謝祭(来場者約2,000名) [5/20] 工場見学受け入れ(小学生88,069、一般15,191、計103,260名) 夏休み乗り物教室(小学生とその保護者 約400名) [8/2,8,9] 環境出前授業(スバル環境交流会)*2(地域の小学校30校 計2,676名対象) 太田市、伊勢崎市、大泉町、邑楽町の各夏まつりへの参加(約1,500名参加) スバルカップ争奪太田市学童軟式野球大会(参加者約500名) [7~8月] スバル旗争奪群馬県学童軟式野球大会(参加者約400名) [9~10月] 上州太田スバルマラソン主催 [10/27] 中学生職場体験学習受け入れ(計8名) [7~11月] 少年、高校生野球教室等開催(参加者合計約1,600名) スバル地域交流会主催ふれあいコンサート(年4回計2,200名参加) 	スバル地域交流会*1活動として ・金山清掃(400名参加) [5/26] ・環境美化活動(延べ約20万人/年参加) [2回/月] 
	埼玉製作所	<ul style="list-style-type: none"> 北本夏まつり参加(従業員とその家族約300名) れんげそうまつりに協賛 	「環境月間」に合わせた清掃活動(103名参加) [6/20] びかびか北本おまかせプログラム(延べ819名参加) 製作所周辺クリーンキャンペーン(368名参加) [6/16]
	宇都宮製作所	<ul style="list-style-type: none"> ふれあい祭り(来場者約8,000名) [10/28] 環境出前授業*2(地域の小学校20校、1,519名対象) 「緑の募金活動」374,133円(8回目 累計2,715,622円) 近隣自治会役員交流会(22名参加で埼玉製作所見学) [12/5] 製作所北側壁面を「ふれあいアトリエ」として一般市民に開放 [7~8月] 納涼祭開催(約7,000名参加) [8/4] 「みゆきっ子環境フェスタ」(御幸小600名+保護者等200名) [2/6] 旧鉄道引込み線を遊歩道として開放 [08年4/4~] 	製作所周辺クリーンキャンペーン(368名参加) [6/16]
	東京事業所	<ul style="list-style-type: none"> 納涼祭開催(約2,000名参加) [8/3] 事業所内体育館の一般開放(毎週月~金、約500名/月) 小学生事業所見学会(地域の小学校8校、740名参加) 	・ 独身寮周辺道路清掃活動(1回/月、延べ240名)
国内関係会社	輸送機工業	<ul style="list-style-type: none"> 宇都宮「緑の募金活動」協賛 交通安全街頭指導 中学生職場体験学習受け入れ(計2名) [8月10~13] 	
	富士機械	<ul style="list-style-type: none"> 本社 納涼祭(800名参加) [8/11] 	本社周辺歩道の清掃(1回/週)
	イチタン	<ul style="list-style-type: none"> イチタン夏祭り(近隣住民200世帯参加) [7/28] スポーツブラザ貸し出し(近隣学校、地域ママさんクラブなど) 	・ 利根川清掃(25名参加)
	桐生工業		<ul style="list-style-type: none"> 工場外周の学童通学路清掃および線路脇除草 [6/1] 工場外周道路の清掃活動 [1回/月、延べ48名] 会社外周清掃活動 [毎週月曜日昼休み]
	スバルロジスティクス	<ul style="list-style-type: none"> 交通遺児助け合いカンパ476,258円 [12/17スバル輸送協力会] 	
海外関係会社	SIA(アメリカ)	<ul style="list-style-type: none"> 募金活動:SIA基金より6月12月の計2回 \$82,543 SIA創立20周年を記念し、ラファイエット市とティピカヌー郡にレガシイを寄付 	
	SOA(アメリカ)	<ul style="list-style-type: none"> NJ アカデミー・フォア・アクアティック・サイエンスにスバル車を提供 環境教育や野生生物のリハビリに取り組む学生にインターンプログラムを提供 ホームレスの人々向け施設を従業員と家族がボランティアで清掃、改装 	・ オレゴン州の海岸の清掃活動 [9/15] 
	SCI(カナダ)	<ul style="list-style-type: none"> アースデイ2007イベントで事業所周辺の清掃活動 	 ・ ミシサーガ市ボランティア清掃プログラムに協力し、地域2.5kmの道路清掃を約束

※1 スバル地域交流会：当社とお取引先さま54社からなる組織で、太田市と周辺地域住民との相互交流、ならびに地域発展を図り「住みよい街づくり」に貢献することを目的とした組織です。
イチタン、桐生工業、スバルロジスティクスの3社はこの活動にも参加しています。

※2 環境出前授業：当社社員が地域の小学校を訪問して環境教育を行う取り組み。

これらの取り組みはスバル地域交流会ホームページにも掲載しております。
<http://www.chiiki-kouryuukai.com/>



従業員一人ひとりが働きやすい、より良い環境に

2007
POINT

- ① 技能の向上と伝承への取り組みとしてスバル技能向上プログラムを導入し、取り組んでおります。
- ② 次世代法による第二次行動計画を策定し、ワークライフバランスの取り組みを推進しています。
- ③ 障がい者雇用率が法定の1.8%を超え、2.0%を達成。今後も促進していきます。

人材育成・福利厚生・雇用・人権

■ 技能の向上と伝承への取り組み

スバル技能向上プログラム

2006年度より、専門性向上施策のひとつとして「スバル技能向上プログラム」を導入し、技能向上に取り組んでおります。この「スバル技能向上プログラム」は、「全体の底上げ」と「技能伝承」を2本柱としております。

■ 全体の底上げ

仕事をするために必要な知識・技能を職種・階層別に定義した「技能資格基準書」をベースとし、技能道場である「スバルテクニカルスクール(STS)」で、基本や原理原則を重視した知識教育・技能訓練を積む内容となっております。

また、技能の向上を技能評価で力量確認することで、技能レベルの向上を実感できる仕組みとしております。

■ 技能の伝承

高度熟練技能者が有する卓越技能やカンやコツを含む特殊技能を伝承していくための仕組みで、「特殊技能伝承コース」「ノウハウ伝承コース」の2コースを設けています。

■ 公的資格取得への支援

自己啓発支援を強化

2007年度から当社では、会社が指定する公的資格の取得を目的とした受験費用やセミナー受講費等が、カフェテリアプラン型福利厚生制度「マイビジョン」による会社補助の対象に加わりました。今後も従業員のニーズに応じた、発展性のある福利厚生制度を通じて一人ひとりの夢の実現に向けて支援していきます。

◆カフェテリアプラン型福利厚生制度「マイビジョン」一覧

カテゴリー	会社補助内容
自己啓発	選択型社内集合研修や社内通信教育、当社指定公的資格の講習・取得、各種スクールなど
生活支援	介護(介護施設)や育児(保育所やベビーシッター)に関する利用、子どもの教育など
人生設計	人生設計関連のセミナーや相談
リフレッシュ	スポーツクラブや宿泊施設、パルク旅行、文化鑑賞、スポーツ観戦、レジャー施設などの利用
自社製品	社内製品(クルマを除く)の購入や系列販社の車検・修理など

■ ワークライフバランスへの取り組み

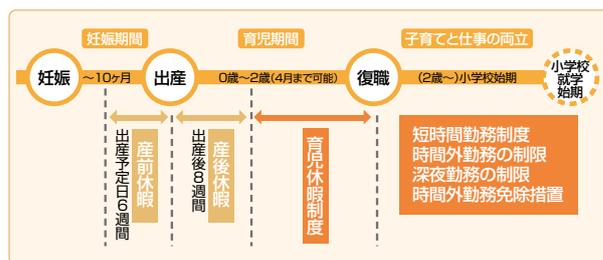
仕事と家庭との両立を支援

従業員が個々の能力を存分に発揮していくためには、仕事と家庭との両立を支援し、働きやすい環境を整備することが重要と考えています。具体的には、子どもが3歳の誕生日を迎えるまで延長ができる育児休業制度や、子どもが小学校に入学するまでの間は短時間勤務ができる制度を導入し、子どもを養育している従業員が働きやすい環境の整備を進めてまいりました。その結果、2007年に次世代育成支援対策推進法(次世代法)による基準適合一般事業主として、東京労働局長の認定を受けております。

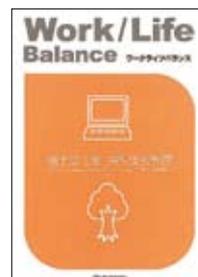
現在は、次世代法による自主的取り組みとしての第二次行動計画(2007~2009年度)を策定し、就業規則への母性保護の規定化や、育児短時間勤務の対象者の見直しなど、色々な制度を従業員がより使いやすくなるための取り組みを進めております。

仕事と育児や家族介護などとのバランスを図りやすい、より良い職場環境づくりに向け、ワークライフバランスの取り組みを推進してまいります。

◆仕事と育児の両立支援の流れ



次世代育成
支援対策
推進法認定
マーク



全従業員に配布した「ワークライフバランス」パンフレット

従業員とともに

■ 60歳定年後の再雇用の促進 シニアパートナー制度

スバルでは60歳定年後の就労問題および人材の活用を図るため、2003年に定年後再雇用制度である「シニアパートナー制度」を導入いたしました。その後「改正高齢者雇用安定法」によって義務化された、「定年後65歳までの雇用継続」へ対応するため、当制度の一部見直しを行い、定年後の再雇用を進めてまいりました。また、2006年度には、定年後再雇用による人材活用をさらに積極的に行うため、当制度の見直しを再度実施しました。今後も「シニアパートナー制度」を通じて、定年を迎える従業員が持つ経験や能力を、後進の指導育成や技能の伝承に活かし、60歳定年後の再雇用の促進に取り組んでいきます。

■ 障がい者雇用の促進 法定雇用率1.8%を達成し雇用促進を継続

障がい者雇用率は2008年3月時点で法定の1.8%を超えて2.0%となっています。当社ではだれもが輝ける豊かな社会の実現を目指し、障がいをお持ちの方の採用を積極的に進めています。現在156名の方が活躍されており、今後も継続的な採用活動に取り組み、障がい者雇用を促進していきます。

Voice



人事部採用担当
前田 利治

多様な人材採用

当社では、特定の大学・学部・学科にとらわれず、多様な人材を採用しています。当社が求める人材は、「自立型人材」であり、それは「自分で問題を発見し、解決策を見つけ、求める結果を出すことに優れる人材」です。この能力を持つ、もしくは素地を備えた人材を求めています。新卒採用に加え、さまざまなキャリアを持つ人材も随時、中途採用しています。

■ 人権の尊重 よりよいパートナーシップを目指して セクハラ防止

当社の企業行動規範には、「私たちは、一人ひとりの人権と個性を尊重します。」と宣言し、人権の尊重をうたっています。また、就業規則には「セクシャルハラスメントを行い職場環境を乱してはならない」と明記されています。

セクハラ行為は、この企業行動規範に反する人権侵害行為そのものであり、当社は決してこれを許しません。

改正男女雇用機会均等法が2007年4月1日から施行となり、男性に対するセクシャルハラスメントも対象となりました。

当社では、労働協約書、従業員就業規則に明記し、「セクハラ防止ガイドライン」を全従業員に配布するとともに、各事業所にセクハラ相談窓口を設けて対応しています。



全従業員に配布した「セクハラ防止ガイドライン」

安全衛生・健康づくり

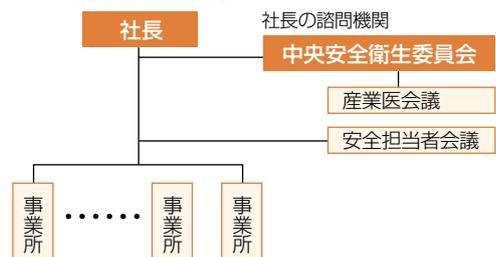
安全衛生 基本理念

「安全衛生はすべての業務に優先する」

安全衛生 基本方針

労働災害、交通事故、疾病、火災等災害のゼロを目指し、全員が安全衛生の重要性を認識し合い、設備・環境・作業方法の改善と管理・意識の向上を図り、安全快適な職場づくりを進める

安全衛生推進体制



■ 労働安全

一人ひとりの安全意識・管理の向上へ向けて

当社は、一人ひとりの安全意識・職場管理の向上と危険を排除する活動に取り組んでいます。意識面ではKYT^{※1}、ヒヤリ・ハット^{※2}活動の実施、管理面では1992年からTSZ^{※3}という各職場の自主管理活動を早期に導入しました。2000年からは、当社独自の小グループリスクアセスメントを導入し、一人ひとりの安全資質の向上とリスクの排除を行っています。また、労働安全衛生マネジメントシステム^{※4}を導入している群馬製作所では、新リスクアセスメントを導入し、内部監査を通じてマネジメントシステムの継続的改善に取り組



み、さらなる安全衛生水準の向上および労働災害防止に努めています。

製造部長（総括安全衛生管理者）を中心に各課のリスクアセスメント活動状況の確認と指導を行うことで、活動のレベルアップを図っています。

◆ 労働災害発生状況推移

年度	2003	2004	2005	2006	2007
労働災害発生件数(件)	48	45	34	37	34
度数率(製造業平均)	0.98%	0.99%	1.01%	1.02%	1.09%
度数率(当社自動車部門)	0.59%	0.37%	0.55%	0.32%	0.51%

■ 快適職場形成

働きやすい職場を作るため改善活動を実施

国の示す快適職場指針の実現に向け、作業環境・作業方法・環境設備などの各項目について、組織的・計画的に改善活動をしています。また、より働きやすい職場をつくるため、休憩所・トイレ・喫煙所・食堂などについての改善、施設のユニバーサル化も進めています。

■ 健康づくり

法定健診項目に必要な項目を追加

いつも体と心が健康な状態で、能力・技術を十分に発揮できることは、事業活動の活性化からも重要なことです。当社では、疾病休業日数を減らす取り組みを行うにあたり、法定健康診断項目に、健康維持に必要な健診項目を加え、疾病の早期発見・早期治療に取り組んでいます。また、メンタルヘルス対策として国の示す4つのケアに則り施策を実施していますが、例えば、臨床心理士による「こころの健康相談窓口」を全事業所に設置しています。

■ 交通安全

交通事故防止への教育訓練

当社は、従業員の業務、通勤、私用すべての交通事故を防止するため、さまざまな取り組みを行っています。群馬製作所、東京事業所では67人の従業員が警察白バイ隊の指導のもと所内で二輪車安全運転教室を開催し、安全運転基本講習と実技指導を行いました。また、安全運転ドライビングシュミレーターを使用して、運転者のドライビング状況の把握を行い、より安全運転をするための教育訓練を実施しています。

群馬製作所では、職場の自主的な交通安全活動の一環として安全運転体験教育を実施しています。運転者だけの訓練でなく、歩行者等から見た運転者の危険行動や正しいタイミングでの右折の仕方等、違った視点での教育訓練を実施しています。



二輪車安全運転教室の様相



ドライビングシュミレーター

TOPICS

講演会

「メンタル不調者等に対する管理監督者としての対応」

第32回全社安全衛生大会では、当社の健康面の重要課題であるメンタル不調者等に対する管理監督者としての対応について、講演および各専門家を交えてパネルディスカッションを開催し、「普段からの部下とのコミュニケーション等」が不調者対応や予防に繋がることを学び、参加者全員で、予防を目指すことを誓い合う大会となりました。



※1 KYT：危険予知訓練のこと。K=危険、Y=予知、T=トレーニング

※2 ヒヤリ・ハット：もう少しで災害となるニアミス事例を収集する活動

※3 TSZ：Total Section Zero（関連する部署が一体となって災害をゼロにする当社の安全活動）

※4 労働安全衛生マネジメントシステム：組織的・安定的な安全衛生管理を推進するため「計画・実施・評価・改善」という一連のプロセスを明確にした連続的・継続的に災害ゼロから危険ゼロの職場を目指すための仕組み。



グループ全体で地球環境問題への取り組みを推進

2007
POINT

- ① 新たにCSR・環境委員会を設置し、これまで以上に活動を推進しています。
- ② 環境パフォーマンスの評価項目・方法を見直し、より合理的かつ有効な評価制度に改定しました。
- ③ 第4次環境ボランタリープランの目標達成に向けて、グループ全体で取り組んでいます。

環境方針

地球環境問題は経営における最重要課題のひとつであるという認識のもと、企業理念に基づいて環境保全に取り組む「環境方針」を制定し、方針達成のための具体的な行動指針を「環境保全の運営基準」として定めて、全員参加で活動を推進しています。

環境方針(1998年4月制定)

常に環境と事業活動の深い関わりを認識し、
地球と社会と人にやさしい商品と環境づくりに努め、豊かな未来の実現を目指します。

環境方針の運営基準

- (1) 商品の開発・設計・製造・販売・サービス・廃棄など各段階における環境への影響を考慮して、積極的な環境保全に努めます。
- (2) 関連する法規制・地域協定・業界規範を順守するとともに、環境上の目的・目標を定めて自主的な活動に取り組みます。
- (3) 「継続的な改善と汚染の未然防止」が重要であることを認識し、一人ひとりが自覚と責任を持って行動します。
- (4) 環境に関し、階層・職種に応じた教育を推進し、環境意識の定着を図ります。
- (5) 計画的な監査・診断を実施し、環境保全活動のさらなる向上を図ります。
- (6) 社会の一員として、地域や社会との交流を図るとともに、環境保全活動に積極的に協力します。

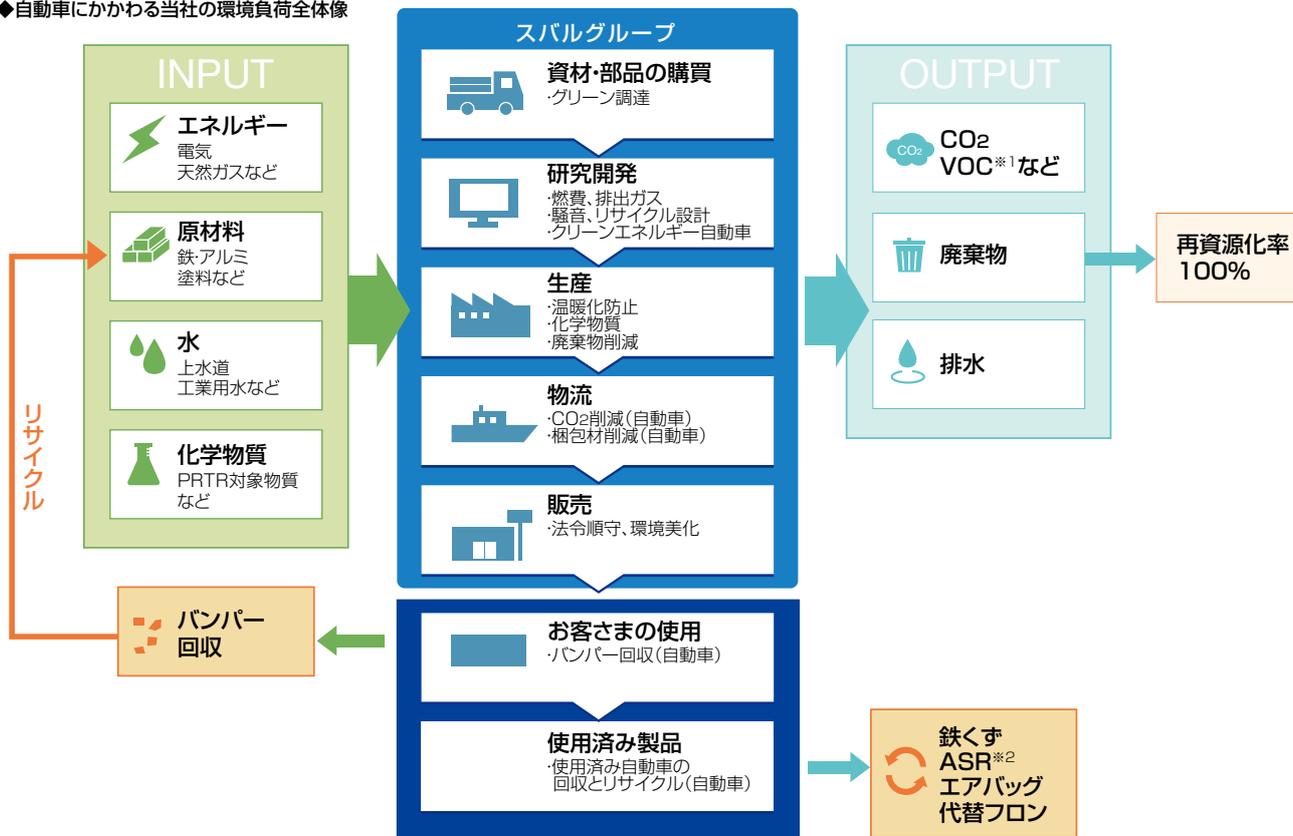
企業活動と環境への影響

スバルは自動車等の輸送機器を中心としたメーカーです。自動車は私たちの暮らしになくてはならない便利で快適な乗り物ですが、限りある地球の資源を消費し地球温暖化の原因となるCO₂や、大気汚染の原因となる物質を排出します。当社はこれら自動車の持つ二つの側面を強く認識し、その上で「豊かな自動車社会」の実現に向けた取り組みを行わなければならないと考えてい

ます。自動車の開発、生産、使用、廃棄、リサイクルという一連のライフサイクルを通して、環境に与える影響を十分に考慮し、環境への負荷を削減することによって、自動車がもたらす豊かさ(気持ちよい走り・快適・信頼)と地球環境対応(燃費・排出ガス性能抜本向上)の融合を目指していくことが、当社の責務だと考えています。

環境マネジメント

◆自動車にかかわる当社の環境負荷全体像

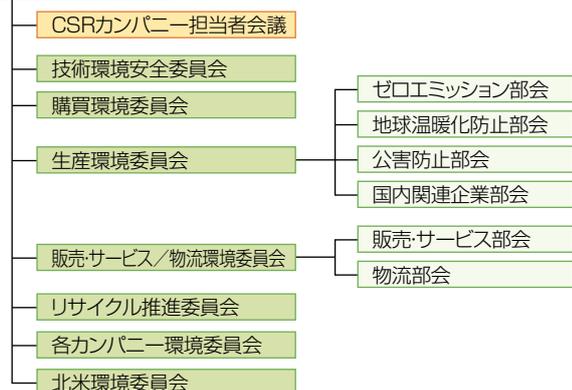


■ 組織体制

新たにCSR・環境委員会を設置

当社では、環境方針・環境保全の運営基準・環境ボランティアプラン目標を達成するための委員会を設置しています。この委員会は環境担当役員を委員長とし、全事業所の代表者が参加し運営される委員会組織であり、2007年度は5月、11月と2回開催されました。なお、従来は総合環境委員会の名称で環境に特化した内容を審議していましたが、11月開催の委員会からは、より広い範囲を審議するCSR・環境委員会に改組されました。今後も、CSR、環境保全を合理的にマネジメントすべく活発に活動を推進してまいります。(総合環境委員会とCSR委員会を合わせてCSR・環境委員会となりました)

CSR・環境委員会



※1 VOC : Volatile Organic Compounds (揮発性有機化合物) ホルムアルデヒドやトルエンなど、常温で揮発しやすい有機化合物のことで、近年、新築の住宅ビルなどに入ると、目や鼻、のどなどに刺激を感じるなどの体調不良が生じるシックハウス症候群の要因とされている。

※2 ASR : Automobile Shredder Residue ボディガラスをシュレッダーで破砕し、金属類をリサイクルのために分別した後の残留物のこと。シュレッダーダストとも呼ばれる。

■ 環境マネジメントシステムの構築状況

特約店でのISO14001 外部認証取得が合計7社に

当社では、2004年度に本社を含む全拠点でISO14001の外部認証を取得済みです。

2007年度には、国内スバル特約店の北陸スバル自動車㈱が新たに認証を取得し、これで国内スバル特約店のISO14001外部認証取得は合計7社となりました。

また、当社では環境監査を毎年度定期的を実施して、環境マネジメントシステムの有効性を確認しています。

ISO14001外部認証取得状況と環境監査の詳細につきましては、当社ホームページ上のwebデータ編に記載しています。

■ 環境会計

環境コストと効果を把握し、効率化を図っています

当社では、2000年度より環境会計を導入しています。当社の2007年度環境コストは164億円となり、前年度より4.2億円増加しました。これは研究開発費の増加によるものであり、生産段階のコストをみると1.1億円の低減が図れています。

また経済効果は20億円となり、前年度より1億円増加しました。この増加は有価物売却単価の上昇などによるものです。

環境会計の詳細につきましては、当社ホームページ上のwebデータ編に記載しています。

環境マネジメント

■ 環境パフォーマンス評価制度

合理的かつ有効な評価制度に改定

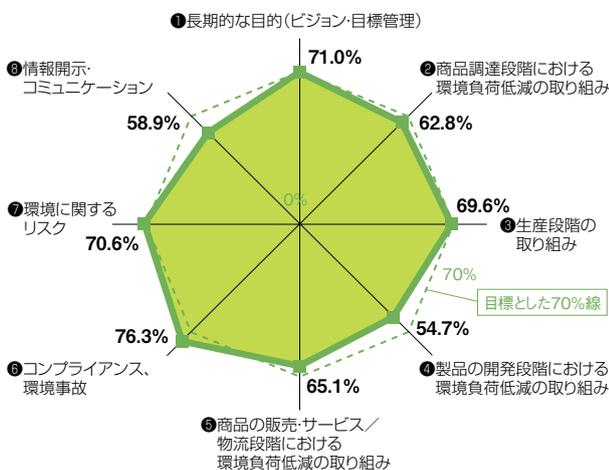
当社では、2002年度より「環境パフォーマンス評価制度」を導入して、さらなる環境パフォーマンスの向上に取り組んでいます。

今回、評価項目・方法を見直し、当社にとってより合理的かつ有効な評価制度に改定しました。

2007年度の評価結果は合計68.8%となり、目標とした70%に対して1.2%の未達となりました。

個々の評価項目の結果は下図のとおりです。今後の取り組み課題として、「スバルグループとしてのEMS活動の推進強化、製品開発段階におけるより高いレベルでの環境負荷低減取り組み」などがあげられました。

◆2007年度 環境パフォーマンス評価結果



環境パフォーマンス評価
CSR-環境委員長・副委員長によるヒアリング

※1 スバル車種別環境情報 <http://www.fhi.co.jp/envi/info/index.html>
 ※2 SUBARU ECOLOGY <http://www.subaru.jp/ecology/index.html>
 ※3 SUBARU-EARTH.com <http://www.subaru-earth.com/staging/>

■ 環境教育・啓発

階層別教育を計画的に実施

当社では2004年度に全社統一の階層別環境教育テキストを作成し、毎年度新入社員をはじめ社内資格昇格者を対象に各階層に応じた環境教育を実施しています。



東京事業所のE-ラーニングを利用した一般教育

また各事業所・カンパニーごとにEMSに基づいた緊急時対応訓練、全員対象の環境保全一般教育、改善事例発表会、お取引先さまへの教育支援などを計画的に実施しています。



群馬製作所 緊急事態訓練



■ 環境コミュニケーション

さまざまな方法で環境情報を発信

スバルでは、事業所ごとに周辺地域の方々とのコミュニケーション窓口を設けるとともに、さまざまな方法で環境情報の発信を行っています。30ページの「地域貢献活動」でご紹介した群馬製作所のスバルビジターセンターには当社の環境取り組みを紹介する「リサイクルラボ」を設けているほか、宇都宮製作所にも廃棄物リサイクルの取り組みを紹介する展示場を設けています。



当社各事業所、関連企業の環境コミュニケーションにつきましては、当社ホームページ上のwebデータ編にも記載しています。

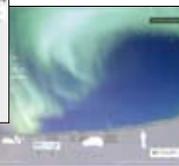
◆環境コミュニケーションツールのご紹介

環境情報発信媒体のご紹介

web



スバル車種別環境情報※1ページ



SUBARU ECOLOGY※2

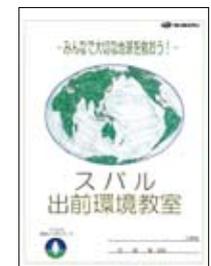


SUBARU-EARTH.com※3
(北米関係会社の環境情報[英文のみ])

印刷物



宇都宮製作所
サイトレポート



群馬製作所
環境出前授業テキスト



環境法規制値超過、環境事故・苦情

2007年度の環境法規制値超過(地域協定値、当社自主基準値の超過を含む)、環境事故および苦情の発生件数とそれぞれの主な内容・対策結果は下表のとおりです。今後も発生原因の究明と対策を行い、「ゼロ」を目指した取り組みを進めてまいります。

◆2007年度 環境法規制値などの超過件数と主な内容

事業所名	発生件数	主な内容	主な是正処置
群馬製作所	水質2件	大泉工場のn-ヘキサン錳油測定値が地域協定値を1回、BOD測定値が自主基準値を2回、超過した値となりました。	ともに原因を究明し、是正処置を実施しています。地域協定値超過につきましては行政にも報告しています。
埼玉製作所	騒音1件	工場北東 赤堀川河川敷側の騒音測定値が法規制値を超える値となりました。	苦情等は受けていませんが、行政に報告し、適正に管理しています。また、本件に関して、換気扇・ファン類の運転音低減対策を検討中です。
	水質3件	下水道放流水のBOD、pH測定値が、計3回自主基準値を超える値となりました。	排水処理設備吸着剤の交換のほか、食堂排水の監視強化を図っています。
航空宇宙カンパニー(半田西工場)	水質1件	半田西工場の河川放流水が、1回自主基準値を超える値となりました。	生産排水と自然雨水の分流工事を進め、PHHの変動要因を少なくし、監視を強化していきます。
東京事業所	水質1件	下水道放流水のn-ヘキサン動植物油測定値が、1回法規制値を超える値となりました。	行政に報告するとともに、食堂グリストラップおよび食堂排水処理設備の点検・監視を強化し、再発防止を図っています。

当社では、各工場に適用される環境法規制値、条例などよりも20%きびしい値を自主基準値として設定し、この自主基準値超過「ゼロ」を目標として取り組んでいます。



当社各事業所、関連企業の環境法規制値超過、環境事故・苦情の詳細につきましては、当社ホームページ上のwebデータ編に記載しています。

◆2007年度 環境事故発生件数と主な内容

事業所名	発生件数	主な内容	主な是正処置
群馬製作所	構内流出事故3件	タンクよりオーバーフローしたクーラント液約30リットルが流出したほか、計3件の事故が発生しました。	事故防止教育の再徹底、チェックシートの改訂、防液堤の設置、環境設備基準の改訂などを実施して、再発防止を図りました。また、他の場所も含めて緊急対応備品などの常備化確認を実施しました。
東京事業所	構内流出事故4件	試験車の確認走行中にオイルが漏洩したほか、計4件の事故が発生しました。	試験車の確認走行作業手順を見直し、漏洩事故の防止を図りました。また所内報に環境事故防止啓発記事を掲載して類似事故の発生防止を図りました。

ここに記載している環境事故はすべて当社事業所内で処理が完了しており、社外に影響を与えた事故はありませんでした。

◆2007年度にいただいた環境関連苦情の件数と主な内容

事業所名	件数	主な内容	主な是正処置
群馬製作所	臭気2件	本工場西側および矢島工場北側にお住まいの方から塗装臭気苦情を受けました。	ヤシガラフィルター設置、清掃強化、減菌剤の使用、塗料の水性化などの対策を図りました。その後は臭気の連続モニタリングを行って確認を続けています。2008年度にはさらに臭気低減対策を実施します。
航空宇宙カンパニー(宇都宮製作所)	騒音1件	飛行場南側(宇都宮市若松原)にお住まいの方から航空機のフライト音に関する苦情を受けました。	飛行経路、高度など地域にお住まいの方に配慮したフライトを実施することで、ご理解いただきました。

環境パフォーマンスについて

当社の2007年度の主な環境パフォーマンスはグラフに示したとおりです。

CO₂排出量、PRTR対象化学物質排出量において低減が図れました。

廃棄物の埋立量につきましては、2004年度にゼロエミッション*4を達成し、現在も継続しています。

また、水使用量につきましては今回、増加してしまいましたが、積極的に低減対策を進めてまいります。

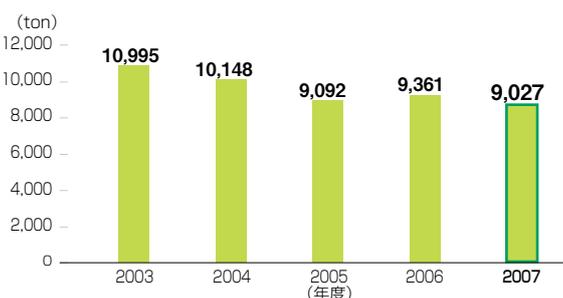
◆全生産事業所CO₂排出量とエネルギー消費原単位の推移



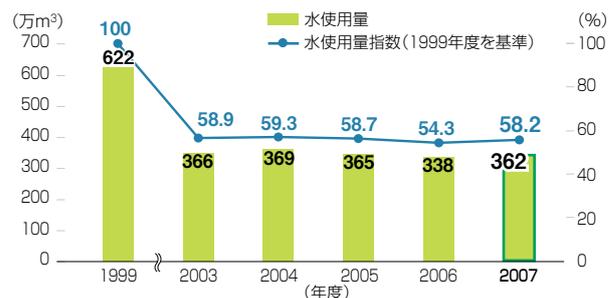
◆全生産事業所PRTR対象化学物質取引量と排出量



◆全生産事業所 生産余剰材のリサイクル量(売却金属くずを除く)の推移



◆全生産事業所水使用量*5の推移



*4 当社のゼロエミッションの定義：埋立物(直接埋め立てされるもの+中間処理後に埋め立てされるもの)の総量が金属くずを除く廃棄物(産業廃棄物+特別管理産業廃棄物+事業系一般廃棄物)の総量の0.5%未満のことをいいます。

*5 水使用量：上水道、工業用水、地下水の合算値。但し、本社地区およびスバル部品センターは集計値に含めていません。

第4次環境ボランティアプラン

2007年度実績と2008年度計画について【概要版】

スバルでは、1990年に環境問題改善プロジェクトをスタートさせ、1993年(第1次)、1996年(第2次)、2002年(第3次)と環境自主取り組みを進めてまいりました。

2007年度からは第4次環境ボランティアプラン(2007年度から2011年度までの新たな環境保全自主取り組み計画)がスタートしました。現在は、この第4次環境ボランティアプランの目標達成に向けて、グループ全体で積極的に環境負荷の低減に取り組

んでいます。

ここでは、2007社会・環境報告書に掲載した第4次環境ボランティアプランの概要項目についての、2007年度取り組み結果および2008年度の計画を掲載しています。



webデータ編では、第4次環境ボランティアプラン全項目の2007年度取り組み結果および2008年度計画をご紹介します。

■ 地球温暖化防止に全力をあげて取り組んでいきます。

項目	目標・取り組み	2007年度実績	評価	2008年度計画
燃費の向上 〔自動車〕	フルモデルチェンジおよび年次改良ごとの継続的な燃費改善を図る。	◆フルモデルチェンジしたインフラガ(WRX、STIを除く)、フォレスターの全車種で平成22年度燃費基準を達成した。	○	継続して、フルモデルチェンジおよび年次改良ごとの燃費改善を図る。
	平成22年度(2010年度)燃費基準達成車をさらに拡大する。	◆乗用車の平成22年度燃費基準達成車の生産台数は全体の90%まで拡大した。 ◆すべての重量ランクで平成22年度燃費基準を達成した ^{※1} 。	○	さらに平成22年度燃費基準達成車を拡大する。
	平成27年度(2015年度)燃費基準に向けた燃費改善を推進する。	◆平成27年度燃費基準(2015年度燃費基準)に向けた燃費改善を推進。2008年5月に達成車を市場投入した。	○	引き続き、平成27年度燃費基準(2015年度燃費基準)に向けた燃費改善を推進する。
クリーンエネルギーを利用する商品の開発	電気自動車・業務用車両を始めとした市場導入を目指し開発を行う。	◆R1e40台を東京電力株式会社に納入し、市場導入に向けた実証実験を促進中。	○	2009年度の市場導入を目指し、開発を行う。
	風力発電システムの開発、市場展開を継続する。 [エコテクノロジー部門]	◆2000KW級大型風力発電システム(SUBARU80/2.0)の量産体制を構築した。 ◆SUBARU80/2.0量産1号機を製造、納入した。	○	大型風力発電システムの拡販を進めるとともに、さらなる性能向上を図る。
地球温暖化の抑制	生産工場からのCO ₂ 排出量を2010年度までに1990年度比15%低減を目指す。	◆CO ₂ 排出量を1990年度比20%削減した。	○	CO ₂ 排出量を1990年度比13%削減する。
物流面における環境負荷の低減	改正省エネ法への確実な対応の実施 ◆2011年度末までに、2006年度比▲5%のエネルギー使用量原単位削減を目指す。	◆エネルギー使用量原単位を2006年度比13.3%削減した。	○	エネルギー使用量原単位を2007年度比さらに1%削減する。

■ あらゆる段階で環境諸問題の継続的改善に取り組めます。

項目	目標・取り組み	2007年度実績	評価	2008年度計画
排出ガスのクリーン化 〔自動車〕	平成17年基準排出ガス75%低減レベル対応の技術を拡大しさらなる低排出ガス対応化を進め、低排出ガス車両の普及を推進する。	◆乗用車の平成17年基準排出ガス75%低減レベル(☆☆☆☆)の生産台数は64%まで拡大した。 ◆乗用車の低排出ガス認定車(平成17年基準排出ガス50%低減レベル(☆☆☆)以上)の生産台数は80%を超え、90%まで拡大 ^{※1} した。	○	引き続き、平成17年基準排出ガス75%低減レベル認定車を拡大する。
リサイクル性の向上 〔自動車〕	新型車のリサイクル配慮設計を推進し、2015年リサイクル率95%に貢献する。	◆再資源化率はシュレッダーダスト(ASR)72.9%で法定基準(2015年)を早期達成した。 ◆エアバッグ類の再資源化率は94.2%で法定基準を達成した。 ◆ART ^{※2} と共同でハーネス設計ガイドラインの策定に取り組み、2008年5月に公表した。 ◆新型車のほとんどの樹脂材料にリサイクル性に優れたオレフィン系樹脂を使用。2008年度以降も使用を継続する。	○	再資源化率の維持向上を図る。 使用済自動車の銅含有部品取り外しのための情報を公開する。 新型車のリサイクル配慮設計の維持・向上を図る。
生産工場における環境負荷物質の管理と排出削減	自動車生産ラインにおけるVOC(揮発性有機化合物)の排出量原単位(g/m)を2010年度末までに2000年度比30%以上低減する。	◆排出量原単位を2000年度比30.9%削減した。	○	排出量原単位を2000年度比30%以上削減を継続する。
生産工場から排出される廃棄物の削減	歩留り向上、取り代削減、塗着効率向上、荷姿改善等の発生源対策により発生量を削減する。	◆2007年度発生量は71,653トン。 1999年度比21%、2006年度比2%低減した。	○	大幅な生産増加により、2007年度比14%増加見込み。対策を上積みし発生量抑制を進める。
	ゼロエミッション(直接、間接を問わず埋立処分量ゼロレベル)を継続する。	◆直接、間接を問わず埋立処分量ゼロレベルを継続した。(サーマルリサイクル後の焼却残渣含む)	○	ゼロエミッションを継続する。
グリーン調達活動 ▶ P.7.8 特集参照	海外も含めお取引先さまに対し、環境マネジメントシステムの構築と環境負荷物質の削減を要請する。環境マネジメントシステム構築については、下記を目標とする。 ●自動車部門、産業機器事業部門 :100%構築体制の維持継続。 ●エコテクノロジー部門、航空宇宙部門 :構築完了を目指す。	◆当社全体で97%(536社中522社)が構築を完了した。 ・自動車部門(海外12社含め333社)、産業機器部門(102社)は100%構築体制を継続維持した。 ・エコテクノロジー部門(40社)は、100%構築を完了した。 ・航空宇宙部門は、(61社中47社)77%が構築した。	○	自動車部門、産業機器部門、エコテクノロジー部門は100%構築体制を維持する。 航空宇宙部門は100%構築完了を目指す。
販売店における環境保全活動の推進	販売店の環境への取り組み活動に対する支援を行う。	◆重点監視項目を選定、店舗の状況を確認した。	○	不備項目の計画的改善を進める。
社会貢献活動の実施	環境イベントへの参加、工場での地域住民の方との交流、工場見学への対応を継続する。各工場周辺地域の清掃活動や緑化活動に継続的に参加する。	◆10万人超えの工場見学受け入れ、地域の小学校へ出向いての環境出前授業(60校約4,200名)を開催した。 ◆延べ20万人以上を動員して、工場周辺地域の清掃活動を継続実施した。	○	さらに範囲拡大を目指す。 工場周辺地域の清掃活動を継続実施する。
環境関連情報の公開	社会・環境報告書の継続的発行、広報資料などによる社会・環境情報の適時公開を図る。 社会・環境報告書記載内容の改善・充実を図る。 (ガイドラインへの対応、グループ企業も含めた報告)	◆2007社会・環境報告書を7月に発行した。 ◆報告書記載内容の継続的改善を進めるとともに、webを活用した別冊編を含め内容の充実を図った。 ◆グループ企業の活動を含めた報告書とした。	○	2008社会・環境報告書を7月に発行する。 報告範囲を広げて富士重工グループ全体の活動報告を目指す。

※1 第3次環境ボランティアプラン(2002~2006年度)の目標項目で、2007年度の取り組みにより目標を達成した項目。

※2 ART: Automobile shredder residue Recycling promotion Team 自動車破砕残渣リサイクル促進チーム。
日産、マツダ、三菱、富士重その他全12社で運営している。



環境に配慮したクルマの開発

2007
POINT

- ① 2007年6月フルモデルチェンジしたインプレッサは、気持ち良い走りと高い安全性を提供するとともに、環境性能も大幅に向上させました。
- ② 2007年12月フルモデルチェンジしたフォレスターは、パッケージング、走り、環境の3つの要素を高次元でバランスさせ、環境に配慮した燃費・排出ガス性能を実現しました。

燃費の向上

目標

平成22年度(2010年度)
燃費基準達成車を
さらに拡大する

クルマは燃料を消費するとそれに比例した二酸化炭素(CO₂)を排出します。燃費の改善を行うことは、限られたエネルギー資源を節約し、二酸化炭素の排出を減らして地球温暖化防止にも寄与できます。スバルでは、AWDや高出力エンジンなどの特長を生かしつつ、エンジンの改良による効率化、駆動系の伝達ロスの軽減、車両の軽量化、走行抵抗の軽減など燃費改善の技術開発を進め、ガソリン自動車の燃費目標である平成22年度燃費基準の達成車を順次市場投入しています。

■ 平成22年度燃費基準達成状況

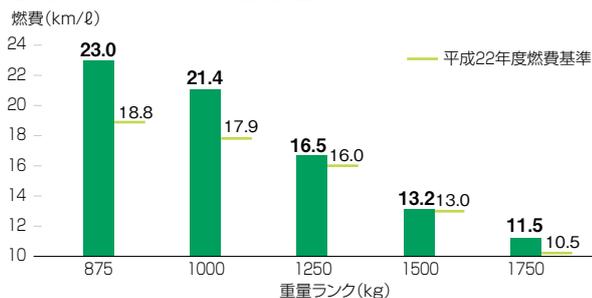
全重量ランクで平成22年度燃費基準を達成

ガソリン乗用車の平成22年度燃費基準達成車の生産台数は90%を占め、全重量ランクで平成22年度燃費基準を達成しました。

ガソリン軽貨物車は2001年度に全重量ランク、2002年度以降は全車種で平成22年度燃費基準を達成しています。

スバルは、今後も平成22年度燃費基準達成車をさらに拡大していきます。

◆ガソリン乗用車の平成22年度燃費基準達成状況



■ エンジンの改良 新型フォレスター

2.0ℓ・DOHCエンジン(EJ20)の新開発

従来型の2.0ℓ・SOHCエンジンに代わり、新開発の2.0ℓ・DOHCエンジン(EJ20)を新型フォレスターに搭載しました。

燃焼室、吸気ポート、インテークマニホールドを新設計し、さらには、可変バルブタイミング機構を採用することで、全域の燃焼効率を向上させ、低中回転域トルクの向上と高回転域の出力向上を図りました。

また、動弁系やピストンの低フリクション



[新開発2.0ℓ・DOHCエンジン]

化、エンジン冷却サーモスタットの最適化、高着火性スパークプラグ採用などにより、クラストップレベルの燃費性能を実現しました。

▶ P14 特集参照

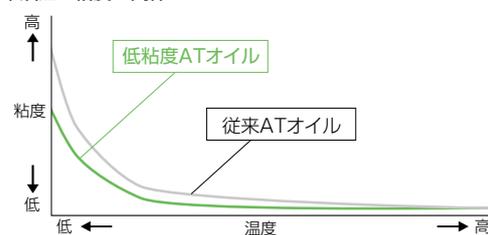
■ 駆動系の改良

低粘度ATオイル採用による燃費向上

オイルは低温時に粘り気(粘度)が高く、高温時は低くなる特性があります。オイルポンプで発生させた油圧と多数のクラッチ板により動力伝達と変速を行う自動変速機(AT)では、低粘度オイルを使用することで、低温時にオイルポンプのロス、せん断かくはん抵抗などを抑え、燃費の向上が図れます。

スバルでは、新型インプレッサのAT車より低粘度ATオイルの採用拡大を図っており、低温時の損失低減効果により、従来比約1%の燃費向上を実現しました。

◆油温と粘度の関係



■ 車体の軽量化

インプレッサで約20kgの軽量化を実現

スバルは、車体の軽量化にも積極的に取り組んでいます。フルモデルチェンジしたインプレッサはサブフレーム廃止や側面構造の合理化、およびハイテン材採用比率の拡大などにより、従来車比約20kgの軽量化を図りつつ、トップクラスの安全性能と燃費性能の両立を実現しています。

クリーンな商品

■ エコドライブ支援の取り組み

運転者・車・環境とのコミュニケーション

スバルは、運転者と車のコミュニケーションを促進するインターフェイスとして、エコドライブ支援装置の開発にも積極的に取り組んでいます。2002年発売のフォレスターへのエコランプ搭載を皮切りに、2006年発売のレガシィには、エコランプに加え、エコゲージ、シフトアップインジケーター(MT車専用)を搭載しています。

■ エコゲージ

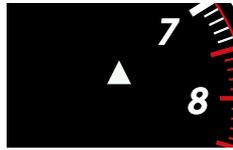
エコゲージの針を「+」方向に振れさせることで、ドライバーにエコドライブ状態を知らせます。意識的にアクセル調整をすることで約5%（社内測定値）の燃費向上が見込めます。



[エコゲージ]

■ シフトアップインジケーター

燃費走行に適したエンジン回転数に達するとインジケーターが点滅し、ドライバーにシフトアップ操作を促します。



[シフトアップインジケーター]

今後もエコドライブ支援装置の開発に積極的に取り組んでいきます。

■ 燃費向上の成果

軽自動車初の平成27年度(2015年度)燃費基準を達成

■ 軽自動車

2006年度から引き続き、スバルのR1、R2、ステラが国土交通省発表の「平成19年の燃費の良いガソリン軽自動車ベスト10(MT車を除く)」上位を占めています。

また、2008年5月にスバル50周年を記念し販売した特別仕様車ステラ L limited、R limitedは軽自動車ですべて平成27年度燃費基準を達成しました。

■ 普通車

フルモデルチェンジしたインプレッサの1.5ℓ DOHCエンジンのFF・MT車、AWD・AT車で平成22年度燃費基準+10%を、FF・AT車(車両重量1,270kg以上)、AWD・MT車で平成22年度燃費基準+20%を達成しました。さらに、フルモデルチェンジしたフォレスターの2.0ℓ DOHCターボエンジン(車両重量1,520kg以上)で平成22年度燃費基準+15%を、2.0ℓ DOHC NAエンジンのAT車(車両重量1,520kg以上)で平成22年度燃費基準+20%を達成しました。

排出ガスのクリーン化

目標

平成17年排出ガス基準75%低減対応の技術を拡大し、低排出ガス車の普及を推進する。

自動車から排出される一酸化炭素(CO)、炭化水素(HC)、窒素酸化物(NOx)などは、特に自動車が集まる大都市部における大気汚染の原因のひとつになっています。スバルは、大気汚染の状況を改善するため、規制より厳しい基準に適合した低排出ガス車(国土交通省認定)を順次市場投入しています。

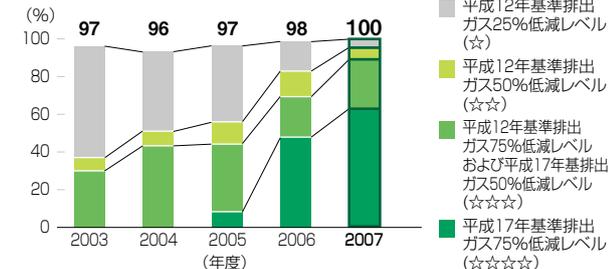
■ 低排出ガスの達成状況

低排出ガス認定車の向上と普及

フルモデルチェンジしたインプレッサ、フォレスターは全車、国土交通省「低排出ガス認定車(平成17年基準50%低減レベル(☆☆)以上)」であり、平成17年基準75%低減レベル(☆☆☆☆)車の生産台数は64%まで、低排出ガス認定車の生産台数は90%に達しました。

今後も、スバルは低排出ガス車の普及を推進していきます。

◆ガソリン乗用車の低排出ガス車比率の推移

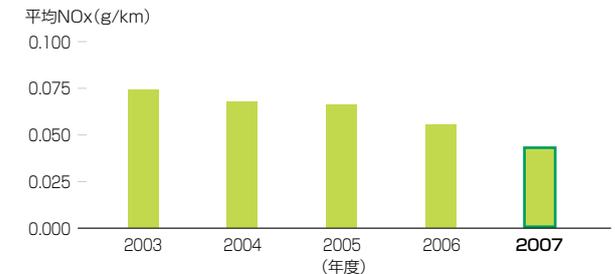


■ 平均NOx(窒素酸化物)の推移

低排出ガス車の投入によりNOxは年々減少

低排出ガス車認定基準に代表される低排出ガス車を順次市場投入していくことによりスバル車の平均NOxは下のグラフのように年々低減しています。

◆スバル車の平均NOxの推移



[注]
 ・出荷時の対応規制値(10・15モード、11モード)から算出しました。
 ・現行テストモードに対応していない車種に関しては、現行モードに対応した規制値または換算値で算出しました。
 ・現行モードとは、10・15モードと11モードのコンバインモードです。



クリーンエネルギー自動車

クリーンエネルギー自動車は、温室効果ガス(二酸化炭素)や大気汚染物質(一酸化炭素、炭化水素、窒素酸化物など)の排出が少なく、ガソリン自動車より環境への影響が小さいという特性を持っていますが、価格や航続距離などの技術的課題があります。スバルでは、ガソリン自動車の走りや利便性などの特性を継承させた、電気自動車などのクリーンエネルギー自動車の開発を進めるとともに、ハイブリッド車や燃料電池自動車に使用する次世代電池開発などにも積極的に取り組んでいます。

■ 次世代電池の開発 200km以上走行可能な 電気自動車を目指して

スバルは、電気自動車の量産化を目指すとともに、将来の電気自動車への搭載を目指した、次世代電池nanoV電池(商標登録申請中)の研究開発にも取り組んでいます。

ナノサイズの結晶を持つことで従来よりも多くのリチウムイオンが吸蔵可能となった、スバル独自開発の、バナジウム材料を正極に用い、さらにはリチウムイオンキャパシタで培ったリチウムイオンプレドープ技術を適用することで、従来比2倍以上のエネルギー密度の実現見通しを得ております。

2007年の東京モーターショーにおいて、nanoV電池搭載のコンセプトカー「G4eコンセプト」を発表しました。

今後さらなるエネルギー密度を高める研究開発を行い、200km以上走行可能な電気自動車の実現を目指します。



コンセプトカー「G4eコンセプト」

■ リチウムイオンキャパシタの開発 大きな電力から小さな電力まで対応できる 蓄電デバイスを開発

スバルでは、大きな電力から小さな電力まで幅広い電力変動に対応できる「リチウムイオンキャパシタ」の開発に取り組んでいます。

環境にやさしいデバイスとして、自動車の鉛電池代替、風力・太陽光などの変動の大きな自然エネルギーによる発電装置への適用、小規模水力や振動などの微小エネルギーによる電力発電装置への適用を目指し、現在、実用化に取り組んでいます。

■ 省エネルギー型ガソリンエンジンの産・学・官共同開発 将来型動力源の技術開発

よりクリーンでエネルギー効率の良い将来型動力源を実現する技術開発は、国家規模での産・学・官の横断的取り組みが必要です。

スバルは、千葉大学・日本大学と共同で、新エネルギー産業技術総合開発機構(NEDO)が実施している「エネルギー利用合理化技術戦略的開発事業」に参画し、高効率エンジンの研究開発を行っています。

先導研究フェーズでは圧縮比14にてノッキングを回避し、熱効率を6~11%改善する画期的な技術を開発しました。実用化研究フェーズでは振動の低減、運転速度の向上に取り組み、2,500rpmでの運転を実現し、実用的な運転領域での熱効率改善効果を確認しました。

また、交通安全環境研究所・富山大学と共同で、鉄道建設・運輸施設整備支援機構(JRTT)で実施している「運輸分野における基礎的研究推進制度」にも参画し、化学的効果によってノッキングを抑制する技術を開発しています。現在、圧縮比12にてモード燃費改善6.5%を達成し、さらに、圧縮比14まで上げる取り組みを進めています。

今後、ディーゼルエンジンに匹敵する高効率で、かつ、有害排出物質が少ない新しいガソリンエンジンの実現を目指します。

■ 騒音対策 交通騒音低減への技術開発

スバルでは、自動車から出る交通騒音の低減にも積極的に取り組んでいます。交通騒音の主な音源となるタイヤ騒音、エンジン騒音、吸排気系騒音に対し、効果的に低減できるように技術開発を進めています。2007年11月発売の新型フォレスターでは、この技術を採用することにより、保安基準に定められた加速騒音レベルに対し、十分な余裕を持って適合できる性能を実現しています。

◆ 新型フォレスターの騒音対策

エンジン騒音低減
- シリンダーブロック剛性アップ
- オイルパン剛性アップ
- 各種補機の騒音低減

吸気騒音低減
- エアクリーター容量増加
- エアクリーターケース剛性アップ
- 吸気チャンバー剛性アップ
- レゾネーター取り付け



タイヤ騒音低減

トランスミッション騒音低減
- ケース剛性アップ
- ギヤかみ合い精度向上

排気騒音低減
- 消音器レイアウト最適化
- サブマフラー大型化
- 遮熱カバー制御化

リアデファレンシャル騒音低減
- ギヤかみ合い精度向上

クリーンな工場

クリーンな工場：生産段階での取り組み

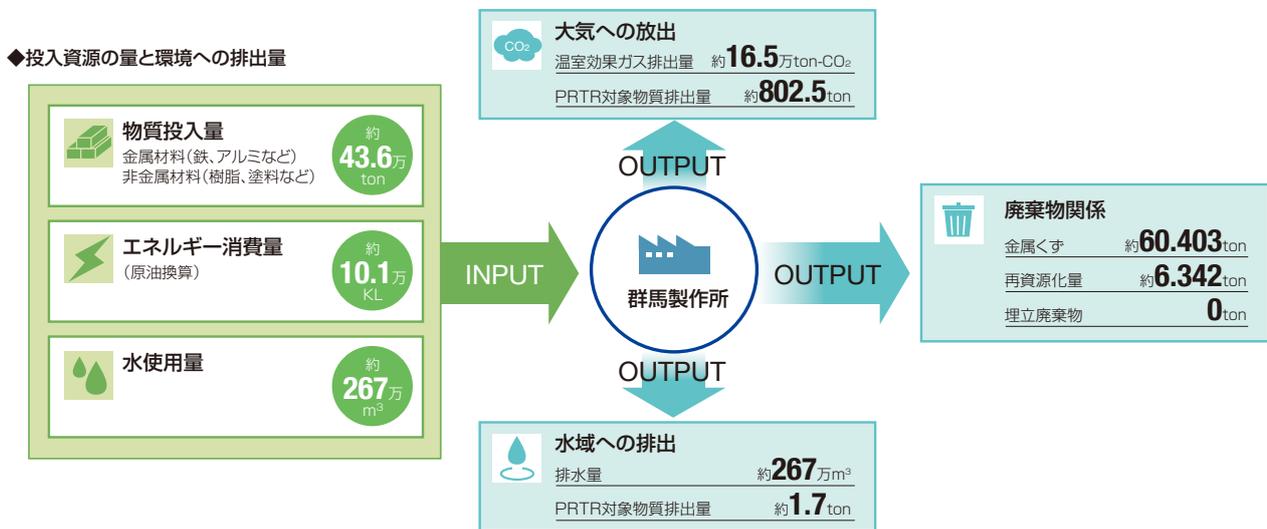
2007 POINT

- ① 廃棄物埋立量は、2004年度からゼロレベルを継続達成しています。
- ② グリーン調達の実践により、お取引先さまでEMS構築を積極的に推進しています。
- ③ 省エネルギー活動への積極的な取り組みで、地球温暖化防止を推進しています。

▶ ②⇒P7・8 ③⇒P17・18 特集参照

自動車製造(群馬製作所)における主な投入資源量と発生物総量

スバル車を製造する群馬製作所における2007年度の主な投入資源の量と環境への排出量は下図のとおりです。



廃棄物削減

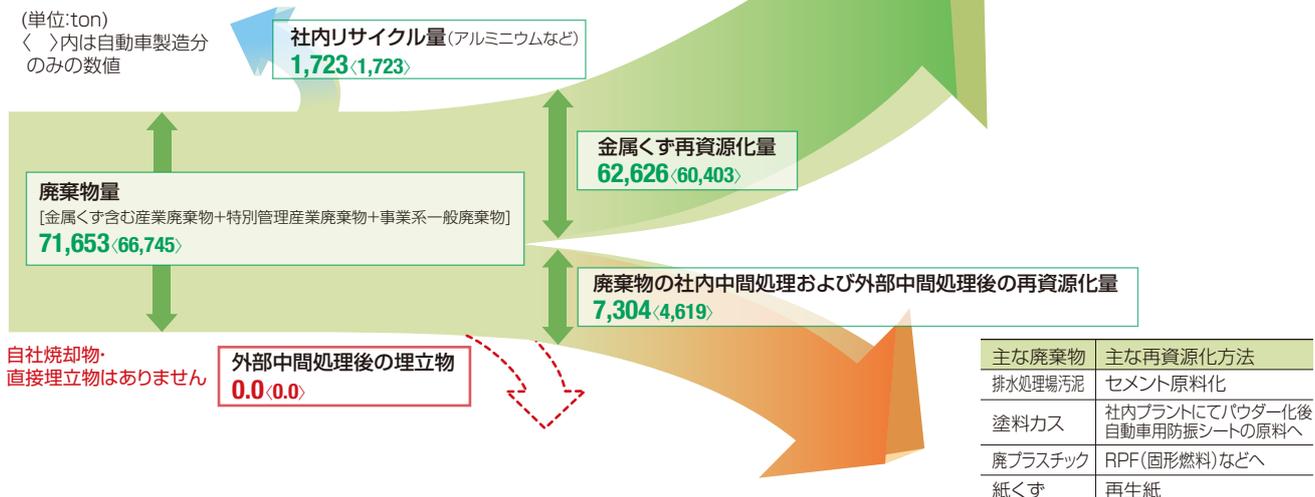
■ 発生量と処理の概要

埋立物発生量は全工場でゼロレベルを継続中

スバルでは、2004年度から廃棄物のゼロエミッションを継続達成しています。2007年度の廃棄物発生量とその処理概要は下図のとおりです。

◆2007年度全事業所および群馬製作所の発生物発生量と処理の概要

(単位:ton)
〈 〉内は自動車製造分のみの数値



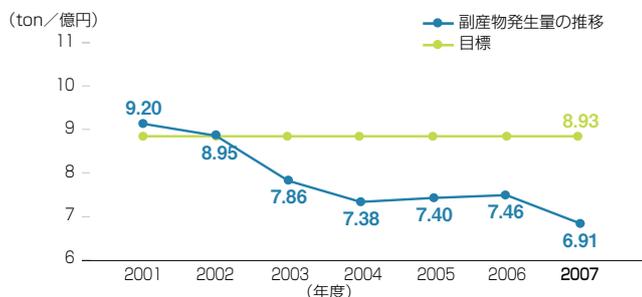


■ 廃棄物削減への取り組み

製品の出荷額に対する副産物発生量が過去最高の値を達成

当社では、ゼロエミッションの継続はもちろん、廃棄物が発生すること自体が無駄と考え、発生量を削減する取り組みを進めています。生産工程で使用する原材料の歩留まり向上や、塗装工場で使用される塗料の塗着効率の向上などの取り組みを進めて、資源の有効利用に努めています。下のグラフは、自動車部門の副産物(金属くずやアルミなどの非鉄くず)の発生量を製品の出荷額で割った指標です。2007年度は6.91と過去最良の値となりました。また、目標値(資源有効利用促進法による副産物発生抑制計画値)に対しては2003年度から継続して達成しています。

◆ 製品の出荷額に対する副産物発生量の推移



環境負荷物質の低減活動

■ 群馬製作所の塗装工程で発生するVOC(揮発性有機化合物)

第4次環境ボランタリープランの目標を前倒して達成

2007年度の塗装面積あたりのVOC排出量は63.2g/m²で、2000年度実績に対して30.9%削減となり、第4次環境ボランタリープラン^{※1}の目標を前倒して達成しました。これは、新塗装工場の稼働による塗料の水酸化や、シンナー回収率向上による成果です。今後は、さらなる低減に取り組んでいきます。

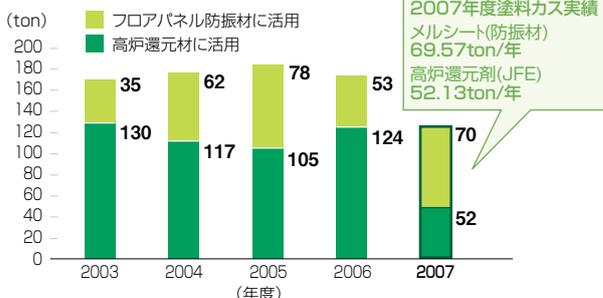
当社では、大気汚染物質・水質汚濁物質・騒音・振動につきましては、法規制値よりさらに厳しい自主基準値(原則として法規制値の80%レベル以下)を設定して管理しています。

※1 第4次環境ボランタリープラン目標値：2010年度末までに2000年度比30%以上低減する。

■ 工場廃棄材(塗料カス)のリサイクル活用

当社では塗装工場から発生する塗料カスのリサイクル技術を確立し、現在、自動車のフロアパネル用防振材の原料や高炉還元材としてリサイクルしています。今後これら以外の用途へもリサイクルしていくことを検討しています。

◆ 塗料カスのリサイクル量



水資源の保護

■ 水資源使用量低減への取り組み

生産量増加による水資源使用量の増加

2007年度水使用量は、全事業所合計で約362万m³で、前年度比約7%増加しました。

各事業所では、給水管からの漏れの点検など、きめ細かな低減活動を実施していますが、その効果よりも生産増による増加分が上回ったことが原因です。今後さらに全事業所で水使用量低減を積極的に進めてまいります。

■ 化学物質の管理活動(PRTR制度)

PRTR対象化学物質排出量を26ton削減

当社では、PRTR対象18物質を使用しています。2007年度の排出量は全事業所合計で843tonとなり、前年度に比べ26ton削減しました。これは、自動車ボディの塗装工程で使用する塗料を水性塗料に変更したことや、洗浄用シンナーの使用量低減などの取り組みによる成果です。

TOPICS

水質汚濁物質の管理

群馬製作所には、水質測定室があり、定期測定のほか、万が一の環境事故の際には即座に測定を行う体制が整っています。



水質測定室で測定を行う環境課員

クリーンな工場

■ 大気汚染物質

SOx、NOxともに自主基準値を順守

ボイラーなどの特定施設より排出される窒素酸化物(NOx)、硫黄酸化物(SOx)の全事業所合計排出量の推移はグラフのとおりです。2007年度は、重油ボイラー燃料の天然ガス化などにより、SOx排出量は削減しました。NOx排出量につきましては脱硝設備停止などがあり増加しましたが、SOx、NOxともに2007年度の定期測定の結果、すべての測定個所で自主基準値を順守しています。

◆ 全生産事業所NOx、SOx排出量の推移

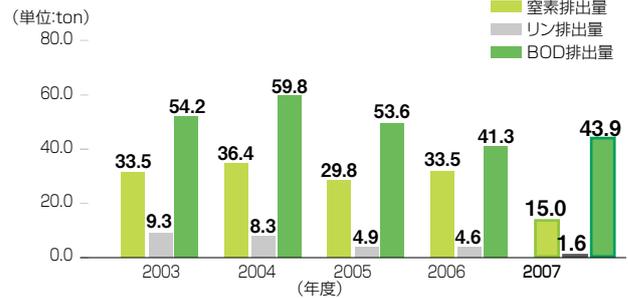


■ 水質汚濁物質

計7件の自主基準値超過

排水中の窒素・リン・BODの全事業所の総排出量の推移はグラフのとおりです。2007年度の定期測定の結果、計7件自主基準値の超過が発生しました。その他の測定結果の自主基準値超過を含めて、詳細につきましては38ページの「環境法規制値などの超過件数と主な内容」欄に記載しています。

◆ 全生産事業所窒素、リン、BOD排出量



定期測定結果の詳細情報につきましては、当社ホームページ上のwebデータ編に記載しています。

■ 土壌・地下水汚染防止

地下水のサンプリング調査を継続的に実施

当社では、1998年より自主的に各事業所の土壌、地下水の調査を行い、その結果を行政に報告してきました。宇都宮製作所など土壌・地下水の浄化対策を行った事業所においても、引き続き地下水のサンプリング調査を継続的にを行い、結果を行政に報告しています。

■ PCB機器などの保管状況

PCB含有機器の管理を適切に実施

当社では、法規を順守し適切にPCBを保管し毎年度届出を行っています。保管している高濃度PCB含有機器(トランス、コンデンサーなど)につきましては、2006年3月に日本環境安全事業(株)(JESCO)に早期処理の登録を行いました。

関係会社の生産段階の取り組み

SIAのゼロエミッション



EPA マット・ヘル氏(右)からWaste Wiseゴールド賞の盾を受け取るSIAレベッカ・ブライトさん

スバルの米国における自動車組立工場であるSIAは2004年に直接埋立処理ゼロを達成し、以来現在も継続して達成しています。リサイクル率は2007年は99.8%となり、2006年実績99.6%をさらに上回りました。この努力に対して、2007年7月CNBCテレビ、2008年1月USA TODAY紙にそれぞれSIAの環境保全活動が取り上げられました。また2007年11月には、米国環境保護庁(EPA)から、Waste Wise賞を昨年に引続き2年連続で受賞しました。(2007年度は産業廃棄物リサイクル部門ゴールド賞)

関係会社の取り組みにつきましては、当社ホームページ上のwebデータ編にも記載しています。

関係会社の環境保全活動の情報交換

スバルでは、国内関連企業部会・北米環境委員会をそれぞれ年2回定期的に開催しています。ここでは、地球温暖化防止・省エネルギー・廃棄物削減・公害防止などの取り組み事例と実績を互いに披露して、当社を含めたスバルグループの環境保全取り組みのレベルアップを推進しています。



北米環境委員会

国内関連企業部会

県知事賞を受賞

「公害防止優良企業」

宇都宮製作所では、2007年9月10日に「公害防止優良企業」県知事賞を受賞しました。

これは日ごろの公害防止への施設面の対応や運用管理が評価されたため、県内で1社の受賞でした。



いただいた表彰状と松本総務部長



環境に配慮した物流

**2007
POINT**

- ① スバルロジスティクスでは、梱包材の再利用化による、資材の削減活動に取り組んでいます。
- ② 完成車の共同輸送とモーダルシフトの推進により、環境負荷低減活動に貢献しています。

スバルロジスティクスとスバルの取り組み

■ 梱包資材の再利用化

海外向けノックダウン部品梱包 発泡資材の削減活動

ノックダウン部品の梱包荷姿設計を担うスバルロジスティクス生産物流本部では、梱包材の再利用化を柱に環境負荷低減活動に取り組んでいます。

取り組み内容としては2005年下期よりエンジン部品梱包資材として使用している発泡スチロール製梱包資材の再利用計画に着手し、2006年3月より1次取り組み、2007年12月より2次取り組みを行い、発泡資材の再利用を実施中です。



梱包資材

■ 輸送の効率化

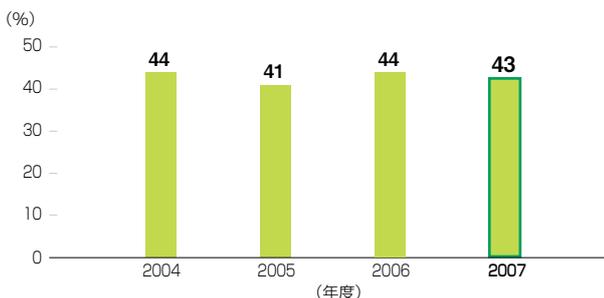
完成車輸送における環境負荷の低減

完成車の輸送では、最適な輸送標準ルートの設定、モーダルシフトの推進、積載効率向上などの輸送の効率化を進めることで環境負荷低減活動に貢献しています。

■ モーダルシフト

スバル車組立工場のある群馬地区から全国の販売店への完成車輸送において、仙台以北と大阪以西に関しては海上(船舶)輸送を利用しています。2007年度の国内完成車輸送に占める海上輸送の比率は43.2%*となっています。

◆スバル車(完成車)の国内輸送に占める海上輸送比率の推移

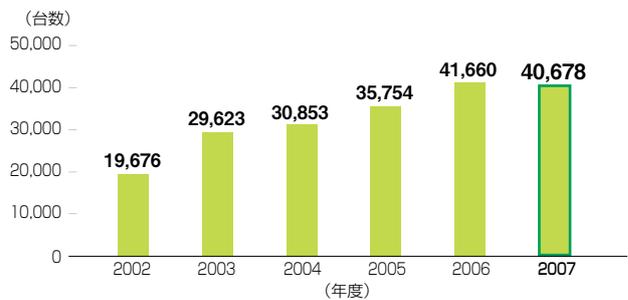


*工場出門台数ベース。海外への輸出台数は含みません。

■ 共同輸送

同業他社との完成車の共同輸送の取り組みを推進し、2007年度の共同輸送取扱量(他社への委託台数と他社からの受託台数の合計)は、40,678台と総出荷量が減少する中、ほぼ前年度と同水準の輸送を行いました。

◆共同輸送取扱量の推移



■ 改正省エネルギー法への対応

2007年度は「改正省エネルギー法」への対応として、デジタルタコグラフ、アイドリングストップ装置、エコタイヤの装着を推進し、定期的に協力会社から走行距離・燃費データを集約することでより精度の高いエネルギー消費量とCO₂排出量の把握を継続して行いました。

今後も年間1%以上のエネルギー消費量原単位の低減を目指して取り組みを進めていきます。



自動車リサイクル

限りある資源を有効活用していくために

2007
POINT

- ① ART乗用車系メーカー4社と共同でハーネス設計ガイドラインの策定に取り組みました。
- ② 新型インプレッサ・新型フォレスターの車室内VOCにおいて、自動車工業会自主目標を達成。
- ③ 使用済み自動車の銅含有部品取り外しのための情報公開により、リサイクル率の向上を推進。

リサイクルへの取り組み

スバルは、「使用済み自動車の再資源化等に関する法律」(以下、自動車リサイクル法:2005年1月1日施行)に則り使用済み自動車(ELV^{※1})のリサイクル・適正処理を行うために、「自動車リサイクルシステム(ARSS^{※2})」を構築し積極的に対応を図ってきました。2007年度実績としてASRリサイクル率は2015年度の法定基準(ASRリサイクル率70%以上)をクリアし、72.9%を達成しました。今後もスバル車のリサイクル性に関して安定的に高い水準を維持することに努めつつ、お客さまにご負担いただくリサイクル預託金の低減を図るために、さらなる効率化と低コストなリサイクルの実現を目指してまいります。

設計段階での取り組み

■ リサイクル配慮設計の推進

リサイクルを考慮した車づくりの推進

■ リサイクル市場調査

国内各地の解体業者、シュレッダー業者、および廃棄物処理業者等を訪問し、実際のELV処理の実態を含めた市場の現状と今後の動向などについて意見交換を継続的に行っています。その結果は、リサイクル配慮設計の方向づけと、今後の具体的な研究テーマ抽出に役立っています。

■ リサイクル性向上の取り組み

<ワイヤリングハーネス類の解体性向上>

ワイヤリングハーネスは多くの銅が使用されているため、シュレッダー処理前にこれらをELVより解体できれば鉄と銅の分別回収の向上につながり、資源リサイクルとしての利用価値も上げられます。効率よく短時間で回収するために回収しやすいハーネスレイアウト、構造について研究を行っています。2007年度はARTと共同でハーネス設計ガイドラインの策定に取り組みました。



ワイヤリングハーネス類の解体性向上

<材質表示の改善>

材料のリサイクルは、その部品の材質がわかることが最も重要です。当社は、業界ガイドラインに先駆けて1973年から樹脂部品への材質表示を実施してきました。従来は部品の目立たない裏面などに表示していましたが、部品を解体しなくても材質表示が確認できれば「解体したが、別の材質だった」という無駄を省くことができると考え、表示の位置を改善しました。2001年から順次「レガシィ」、「インプレッサ」、「ステラ」をはじめスバル車全車種のバンパーに実施しています。



材質表示の例
(>PP<のPPは「ポリプロピレン」を表します)

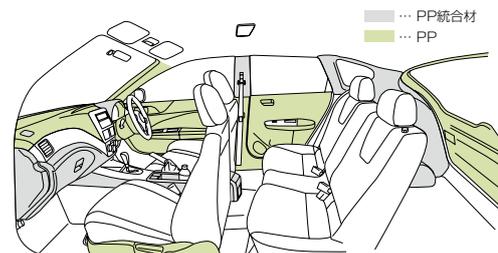


解体しなくても材質が確認できます

<リサイクルしやすい材料の採用>

新型車・モデルチェンジ車のほとんどの内外装樹脂材にリサイクル性に優れたオレフィン系樹脂を使用しています。特に、バンパーにはバンパー用の、内装部品には内装用の統合材を採用しています。

◆内装用統合材、オレフィン系樹脂の使用状況「新型インプレッサ」



※1 ELV : End of Life Vehicles

※2 ARSS : Automotive Recycle System of SUBARU



■ 適正処理性向上の取り組み

特に、フロン(エアコンの冷媒)、エアバッグの適正処理は自動車リサイクル法でも規制されており、今後の開発車では、より処理しやすくすることが不可欠と認識しています。

<エアコン冷媒の削減>

エアコン冷媒は現在オゾン層に害のない代替フロンHFC134aを使用していますが、地球温暖化に影響があるとされているため、HFC134aの使用量削減およびエアコン使用過程における洩れ量の削減にも取り組んでいます。また、フロン以外の代替冷媒の研究も進めています。▶ P17 参照

<エアバッグ類の処理性向上>

エアバッグおよびプリテンショナー付シートベルトは、事故の際には乗員の衝撃低減に対し大いに貢献をします。反面、大多数の車でこれらエアバッグ類が未使用のまま廃車されます。自動車リサイクル法においても、これらエアバッグ類の処理が求められていますが、より安全かつ容易な方法を求め、「車上作動処理」「取り外し回収」の両面より、関連部品も含めた最適構造の研究を行っています。



使用済み自動車(ELV)の処理

■ 使用済み自動車の銅含有部品取り外しのための情報公開

「全部再資源化」への取り組み

富士重工業ではELVのリサイクル率のさらなる向上のために「使用済み自動車の銅含有部品取り外しのための情報公開」を作成しました。この情報はARTのホームページで公開されています。

現在、乗用車のリサイクルにおいてASRを発生させずリサイクル率を向上させる手段としては、「全部再資源化」と呼ばれる方法がとられています。

これは廃車ガスを電炉等に投入、鉄分を溶解し建築用資材などとして製品化するものです。この際、ASRのもととなる部品類は炉の中で燃焼、熱源として利用されるため(サーマルリサイクル)、埋め立てなどの処理を行う必要がありません。

この「全部再資源化」を実施するには鉄鋼製品の品質保持のた

■ 環境負荷物質の削減

削減への取り組みを拡大展開し、継続実施

自動車工業会の自主行動計画に基づき、環境負荷物質4物質(鉛、水銀、カドミウム、六価クロム)の削減に取り組んでいます。一部前倒しで既に目標を達成していますが、2007年度は鉛化合物のペアリングシェル&ブッシュ、機械加工用アルミを鉛フリー化するとともに、鉛フリーはんだをエアバッグセンサー、アンテナ、スピーカー、カーナビに加え、新たにシートベルトおよびドアミラー等の一部に採用し、順次拡大展開を図っています。

◆削減目標/自動車工業会の自主行動計画(新型車より)

削減物質	目標(実施時期)	削減内容
鉛	2006年1月以降	1996年比、1台あたりの使用量1/10以下
水銀	2005年1月以降	一部(ディスチャージヘッドライト、カーナビの液晶パネル等にごく微量に含有)を除き、使用禁止
六価クロム	2008年1月以降	使用禁止
カドミウム	2007年1月以降	使用禁止

■ 車室内VOCの低減

車室内環境快適化のさらなる向上

人体の鼻、のどなどへの刺激の原因とされるホルムアルデヒド、トルエン等の揮発性有機化合物を低減するために、車室内の部材や接着剤の見直しに取り組んでいます。2007年度の「新型インプレッサ」、「新型フォレスター」では、厚生労働省が定めた指定13物質について、室内濃度指針値を下回るレベルに低減し、自動車工業会自主目標^{※3}を達成しました。なお、昨年度の「ステラ」でも前倒しで達成しており、今後も、厚生労働省の室内濃度指針値以下にする取り組みを進め、さらなる車室内環境の快適化に努めていきます。

め、廃車ガラに含まれる銅含有量を極力少なくする必要があり、事前の銅含有部品取り外しをいかに効率良く、徹底して行えるかが重要となります。

この銅含有部品の大部分を占める「ワイヤリングハーネス」が車体のどの部分にレイアウトされているかを、現在ELVの主流となっている過去の生産車に関して公開するのが、「使用済み自動車の銅含有部品取り外しのための情報」の主眼です。

富士重工業では2007年度中にレガシィ(1994年国内発売車)とヴィヴィオ(1993年国内発売車)の情報を完成させ、2008年5月より公開しています。

またART乗用車系メーカー4社とともに、「ワイヤリングハーネス」および関連部品の解体容易設計のための「乗用車ハーネスのリサイクル設計ガイドライン」の策定に取り組み、ARTホームページ上で公開しています。

※3 自主目標：日本自動車工業会が発表した2007年度以降の新型乗用車(国内生産・国内販売)に対する「車室内のVOC低減に対する自主取り組み」にて、厚生労働省が定めた13物質について、室内濃度を指針値以下にするというもの。

クリーンな販売・サービス

『クリーンな販売店』に向けた取り組み

2007
POINT

- ① 環境コンプライアンス重点項目を設定し、改善に取り組んでいます。
- ② 地球温暖化防止のため、省エネルギー・CO₂排出量削減に取り組んでいきます。
- ③ 2007年11月に北陸スバル自動車(株)が新たにISO14001の認証を取得しました。

販売・サービス段階でのリサイクル推進

■ 使用済みバンパーの回収

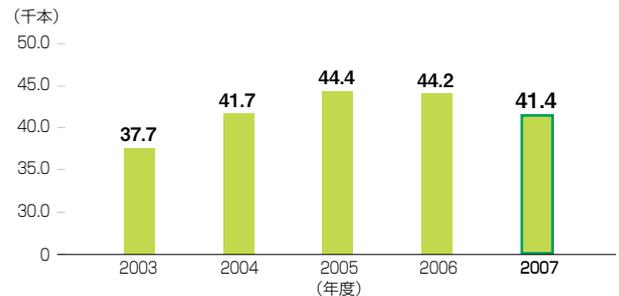
使用済みバンパーを各種部品にリサイクル

当社では業界ガイドラインに先駆けて1973年から樹脂部品への材料表示を行ってきました。この取り組みは現在、修理で交換した使用済みバンパーを回収して自動車部品にリサイクルする活動に役立っております。2007年度、全国から回収した使用済みバンパーの本数は、41,412本(前年度実績44,242本の93.6%)でした。回収したバンパーは右表のように、スバルの各種部品にリサイクルし活用しています。

◆使用済みバンパーの車種別部品活用例

対象車種	対象部品
R1,R2,プレオ	ユニバーサルジョイントカバー アンダーカバー
サンバー	エアガイド エンジンカバー
レガシィ	アンダースポイラー バッテリーパン リヤスカート エプロン
インプレッサ	トランクトリム

◆使用済みバンパー回収本数の推移



販売店での取り組み

■ 販売店での改善活動

環境コンプライアンス重点改善項目として、「廃棄物管理」「水質汚濁防止」「防火管理」「化学物質管理」の4項目を掲げて点検・改善活動を進めています。

既に全店舗の点検は完了しており、不備事項の改善をスタートしています。

■ 販売店での地球温暖化防止対策

近年の環境問題の主要テーマといえる地球温暖化防止に着目して、以下の2項目について積極的に推進しています。

- 省エネルギーへの取り組みと、エネルギー使用量・CO₂排出量の把握を進めます。
- チーム・マイナス6%への参加を推進します。

*2008年1月現在、特約店6社が登録済みです。
山形スバル(株)、富士スバル(株)、滋賀スバル自動車(株)、大阪スバル(株)、東四国スバル(株)、南九州スバル(株)の6社

※1 業販店：当社から直接ではなく、各地域のスバル特約店よりスバル車を仕入れて販売していただいているショップ。

■ ISO14001 認証取得状況

2007年11月には新たに北陸スバル自動車(株)がISO14001の認証を取得しました。

これで認証を取得した特約店は7社となりました。

[ISO14001 認証取得済みの特約店]
千葉スバル自動車(株)、青森スバル自動車(株)、富士スバル(株)、大阪スバル(株)、新潟スバル自動車(株)、熊本スバル自動車(株)、北陸スバル自動車(株) (取得順)

■ 環境啓発活動

スバル車をお取り扱いいただいている業販店*1さま向けの広報誌「スバルだより」に、環境啓発記事を連載して、環境への取り組みへの理解を深めています。



第三者評価



株式会社創コンサルティング
代表取締役
海野みづえ

CSR活動の全体

CSRは多様なステークホルダーに対応する企業活動であり対応する範囲が広がりますが、関心度、緊急度の高い課題には優先的に推進することが重要です。昨年から急速に深刻化している地球温暖化問題はその代表で、富士重工業でも既に事業戦略のうえでこの問題を軸として展開されています。ベースとなる基本的CSR(守りのCSR)の強化はもちろんのこととし、自動車を中心とするモノづくり会社として、世界の課題解決につながる事業としてのCSR、つまり戦略的CSR(攻めのCSR)の両面が経営には必要です。

富士重工業が目指しているビジネス・ケースは、①環境性能を実現する自動車開発、②クリーンエネルギーの開発、といえるでしょう。しかしCSR報告書は網羅性に重点を置いていることから、かえって事業に関連するCSR活動が見えにくくなってしまっています。今後は自動車会社ならではの特色あるサステナビリティ戦略を柱とし、これに基本的なCSRをベースとして位置づけるという、企業の姿勢が読み手にも明確にわかる報告をされてはと考えます。

トピック別の活動

■ CSR調達

早急に形を整えるということだけでなく、3年かけて考えていくというプロセスを途絶えさせずに続けてください。まず各事業部の購買担当者が納得いかなければ、現場に根付いた取り組みになりません。今後、アジアや中国など海外のサプライヤーが増えるのであれば、この課題はさらに深刻になってきます。サプライヤーとの協働や地域の課題を一緒に解決していくという姿勢を基本に、ガイドラインの構築に向けて準備をしてください。

■ 顧客対応

昨年4月のお客さま第一推進部の設置後、1年間で成果が徐々にあがってきているようです。チェックシートによる課題の見える化の次は、これらを解決する実践プログラムの具体化になります。本部との連携のもとで内

昨年の評価についての対応は本報告書でも報告されており、すぐに成果の出せない分野についても取り組みを始めていることが伺えます。今後ともCSR担当者だけでなく、富士重工業の社員全員が意識を持ち続けていられるよう、継続して取り組んでください。

部でのコミュニケーションを深め、特約店のベストプラクティスを他の店舗にも展開することで、「お客さま第一主義」を浸透させてください。

■ CSRでのPDCAの展開

活動の基本となる方針の設定や体制の構築については、CSRのどの分野についても大方の整備が進んでいます。意識調査も継続して行っており、海外への展開も徐々に広がっていることが伺えます。体制づくりだけで終わらず、成果のチェック～アクションの実施を各担当部門に徹底してください。

報告の媒体と内容

CSRについての方針や体制の情報と毎年のパフォーマンス報告の情報等が混在しており、ひとつの冊子にすべてのCSR情報を掲載することが難しくなっています。記載内容が多くなるため、すべての読者のニーズに応えるようにもかえってわかりにくいという問題にもなります。そこで、下記のようなケースはウェブでの掲載を併用することを提案いたします。

- 人事制度、環境負荷への取り組み、日常的な改善や地域貢献活動など、一度構築すれば継続される基盤部分と、これに伴うオペレーションの実際やパフォーマンス報告。
- 車種ごとの自動車の環境性能。冊子ではすべてのモデルの技術情報や環境性能を掲載することはできないため、情報量に偏りが生じる。

プロフィール

海野 みづえ

株式会社創コンサルティング 代表取締役

<http://www.sotech.co.jp>

経営コンサルティング会社に勤務の後、1996年に創コンサルティングを設立。日本企業のグローバル経営に視点を置き、独自の分析眼で環境・CSR分野での経営のあり方を提言、企業活動の実務をサポートしている。プラザー工業社外取締役、東京大学大学院、法政大学大学院非常勤講師。著書に、「グローバルCSR調達」、2006年(共著)、「SRIと新しい企業金融」、2007年(共著)などがある。

第三者評価をいただいて

今年は昨年に引き続き、創コンサルティングの海野みづえ様に、当社のCSR・環境委員会委員長の高木代表取締役専務、同副委員長の高橋執行役員に対するトップインタビューや購買本部長の石原常務とのヒアリングを通じ、スバルの社会性および環境活動を客観的にご確認いただきました。

今後、これまでいただいたご意見を真摯に受け止めて、諸活動のレベルアップを図ってまいります。

(1) CSR活動全般

スバルグループの従業員一人ひとりが「CSRは企業経営そのもの」という基本的な考えを再認識し、「コンプライアンスの順守を主体とした守りのCSR」に加え、「総合輸送機器メーカーとして競争力のある商品、サービスの提供をはじめとした攻めのCSR」活動の強化を通じて地球温暖化等の社会的課題への対処や地域貢献を積極的に推進してまいります。

① CSRマネジメント

スバルグループとして、「守りのCSRと攻めのCSR」という基本的な

考えと確実なPDCAマネジメントの実施による活動のレベルアップを推進してまいります。

② お客さま第一

「お客さま第一」に関するベストプラクティスの把握と共有およびプロセス・ベンチマーキングの徹底により、スバルグループにおける「お客さま第一主義」の実現を図ってまいります。

③ CSR調達

ISOによるCSRガイドライン策定等のグローバルな動向を注視しつつ、お取引先さまや地域との連携を図り、CSR調達ガイドラインの策定、準備を進めてまいります。

(2) CSR報告のあり方

2006年から環境報告書を社会・環境報告書に改めて発行してまいりました。

これまでにいただいた読者の方々のご意見も踏まえて、より社会性を重視したCSR報告書への変革、冊子版とweb版との位置付けを含めて本報告書のあり方を見直してまいります。

～編集・発行～

富士重工業株式会社 総務部 CSR・環境推進室 ●鈴木達也 関川隆雄 栗田一幸

お問い合わせ先 ●TEL03-3347-2036 FAX03-3347-2381

制作支援・印刷 ●日本ビジネスアート株式会社



環境シンボルマークについて

2005年6月に、当社はスバルグループの環境シンボルマークを設定しました。マークの中心に「葉」をデザインし、「緑の大地」と「青い空」の地球をコンセプトとし、当社の環境方針に述べられている「地球と社会と人にやさしい商品と環境づくり」に積極的に取り組んでいく想いをこのマークに込めています。

富士重工業株式会社

Fuji Heavy Industries Ltd.

〒160-8316
東京都新宿区西新宿一丁目7番2号

2008年7月発行

用紙での配慮



FSC認証紙の使用

厳しい基準に従い、適切に管理された森林の木材を原料にしている紙を使用しました。

印刷での配慮



Non-VOCインキの使用

VOC（揮発性有機化合物）成分ゼロの環境に配慮した100%植物油インキを使用しました。



水無し印刷

有機物質を含んだ溶液が少ない、水なし印刷方式で印刷しました。